

---

# 魔女とお嬢様

深月織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女とお嬢様

### 【Nコード】

N5858F

### 【作者名】

深月織

### 【あらすじ】

ある日突然やって来た、私のお嬢様は。秘密を隠した王子と  
魔女の新婚(?)ラブコメ。

一章秘密篇完結

3/20外伝を分離しました。それに伴い、小話・設定覚書・解説篇の序を新たに入れ換えました。

## 第一話 お嬢様は突然に

ありえない。

ありえないから、ソレ。

「カノンちゃん、お土産だよ！ お・ム・コ・さん」

と、一ヶ月の外交出張から帰ってきた父があたしの目の前に押しやったもの。もとい、人物は。

「初めまして、カノン殿。ふつつか者ですが、これから宜しくお願ひします」

……ありえない。

少し屈んで、手に取ったあたしの指先に口付ける所作も堂にいった。銀髪紫眼の、美青年。

て言うか王子。

比喩でも何でもなく、王子。

あたしが住むこの国、ブランシェリウム王国の、皇太子。

正真正銘、

王子殿下が今、  
あたしの目の前に、

あたしのお婿さんとして立っていた。

### 1．お婿様は突然に

「……うわービックリしたあ、もお、殿下もお父様も真面目な娘をからかわないで下さいよう、王子様がお婿さんなんて、カノンうっれしい

で、何の遊びなわけ、コレ」

前半は棒読み、最後の一言は親父を睨み付けて言った。

目の前に、式典の時や週に一度のバルコニーでのお顔見せでしか見たことがない（しかも豆粒サイズ）キラキラした青年がいることは置いといて、

あたしは頭を振れば必ずチャランポランと音がするに違いないと確信している実父に詰め寄る。

「もう届け出も提出済みだもん、結婚オメデト〜我が娘！」

パァァン！！



名を入れて届け出やがったのか、バカ親父っ！

あああああ、

ヤバイ、

長に連絡しなきゃ、

どやされる、

黙って婿とりなんて、

違う、

そんなことよりどうにかして無効に出来ないの？

王子が婿養子ってどんな無茶すればそんなこと成立するのよって  
いうか、

意味わかんない。

伯爵家の娘とは名ばかり、どちらかというと生業の特殊さで有名  
なはずのあたしと王子が結婚する意味がわかんない、

普通王族の結婚でもっと前から宣伝して盛大に式を開いて外貨を  
集める…ってんなことたどうでもいい、

なんだってあたしが王子と結婚しなきゃなんないのよ？

しかも知らない間に！

「カノン姫」

地面に倒れ伏した親父をヒールの踵でもって踏みつけていると、  
躊躇いがちに、青年の声。

は。

王子の前で親子喧嘩だなんて品のないことしちゃったわ。

乱れた髪と衣服を直しつつも、親父から足は退けない。

激しい親子喧嘩に退いているかと思いきや、王子さまは憂いを増した瞳であたしを見つめ、麗しい声で哀しげなささやきを落とされた。

「姫は、私が夫ではご不満だろうか…」

は、はいいつ?!

杖を握っていない方の手を取られ、青年の両手が包み込むように握ってくる。

あ、剣ダコ。

王子さまつつつても、軍務に就いてたっけ、このひと。この固さから言ってお飾りじゃない技量があることが窺えた。今さらな発見をしていると、ぐっと間合いを詰められる。

けぶる銀の睫毛から覗く、宵闇色の紫紺の瞳が、じつとあたしを見つめて。

射ぬかれたように、その視線から逃れることが出来ない。

お、王子には魔眼の素質はなかったわよね??

いや、あの、ええと。

「誠心誠意、貴女を愛すると誓います。どうか、わたしを夫としてくれませんか…?」

ぎゃーーーーーッ!!

なに、何なの、そんな瞳で見つめるのはヤメテエエエッ!!  
こっついうのに免疫ないのよこっちはああ!!

「……二十六にもなるのに魔術にばかりうつつを抜かしているからだ  
よ、カノンちゃ、ぐえ」

余計なことを口走る親父のみぞおちの辺りを力を込めて踏みつけ、  
黙らせてから、あたしの手を握ったままの王子に向き直る。

「あのですね、殿下」

「イデイと」

……、

「……イデイ様、貴方がイヤとかではなくてですね、大体、初対面の  
女と見合いもデートも求婚もすつ飛ばして結婚て本気ですか。  
うちのバカ父の悪ふざけに付き合う必要なんてないんですから、  
傷が浅いうちに王宮へ戻られた方が」

「初対面の女性と結婚なんて良くあることです。うちの両親もそう  
でした」

……しまった王族。

政略結婚の温床だ。

常識が通用しない。

「いや、ええと、ですが陛下や他の方々が納得されないでしょう？」

殿下世継ぎじゃないですか、いくら何でも、結婚しましたー、そうですねー、で済まされるわけないし」

「王位継承権は放棄してきました。父の許可も得ています。他の者の意見など関係ありません」

イケイケ殿下ー、とか煽る親父をもう一度踏み、あたしは今耳にした到底信じられない言葉に、はああ？ とスットンキョーな声を上げる。

さて今なんつった。

王位継承権を？

放棄？

「 はあああッ?! 」

ひたすら面食らつて頭上を見上げるあたしの頬に、指を触れ、王子が清々しく華やかに微笑まれた。

「貴女の夫になるには、王位など邪魔なだけでしたから。幸い、兄弟は多いので問題はありません」

いやあるだろありまくりだろ！

ダメだ、この王子話を通じない、少なくとも王宮仕えの文官である親父になんとか言ってもらおうと、足下を見る。

「ちょっと親父！ 臣下として諫めるべきところじゃないの、ここは！」

「だってお嬢さんとしては申し分ない相手だもん。お父様は早く孫の顔が見たいんだもん。殿下がどうしても言うなら、僕には逆らう権利ないもん。ただでさえカノンちゃん嫁き遅れだし」

だ・れ・が・い・き・お・く・れ・だ・！

憤りのままグリグリ親父の背中を踏みつけていると（親父は、あ、そこそこもうちょっと右、などとマッサージだと思ってるんじゃないかな発言をしていたが）、フワリ、と身体が浮く。

クルリと向きを変えられて。

私は小さな子どものように、王子に抱き抱えられていた。

いや、確かにあたしは母親似でこの辺りの人々より小柄ですけどね？ この抱っこのされ方は、二十六歳妙齡の乙女としては屈辱的

……、

「その様にしては舅殿がお可哀想ですよ。私が無理に話を進めたのですし」

王子は至近距離でその美貌を曇らせて、言う。

ちよ、顔が近い近い近い！！

…あ？

今変なこと言わなかった？

「私が是非にと願ったのです。」

貴女の夫になることを」

柔らかいものが額に押しあてられて。

デコチューされた、と理解する間を与えず、

乙女の夢から現れた王子様そのものの青年が、目も眩む微笑みをあたしに向けた。

「カノンドの、貴女に私の一生を捧げます」

……………だから、何で？

何で、王子様が、あたしの婿になるのよおおおっっ！！！！！？

っっく。

## 第二話 ムコ殿は王子

あたしは今、人生最大のピンチに立たされている。

ちよこん。と、大人の男のくせに可愛らしい風情で私のベッドに腰掛けているのは、白い夜着を身につけた王子様。ドアにへばりついているあたしを不思議そうに小首を傾げて見ている。

「お眠りにならないのですか、カノン殿」

「ええええちよつと喉が渴いたから何か取りに行こうかと」

苦し紛れに言ったその言葉に、王子の視線がサイドテーブルに置かれた水差しに向かう。

あわわわわ。

その間もあたしの手はドアノブを掴み、この状況からトンスラすべく必死で動かそうと試みている訳だが。

「ごめんなさいごめんなさいお嬢さま、旦那さまのお言い付けなんですここを開けるわけには行かないんですうううっ」

扉の向こう側で同じく必死に動かないようノブを押さえているメイドの泣き声。

チッ、リリアが相手じゃドアをぶち壊すことも出来やしない。

クソ親父め、ウマイこと謀りやがって。

窓から飛んで逃げようにも、寝台のすぐ側を横切らないといけないし。

いや、育ちのよい上品な王子が、腕づくでナニかをするなんて思ってるワケじゃないけどね？

ソロリ、背後を窺つと、フワリと微笑む麗しの夫と目が合う。

そう、夫。

本日出来立てホヤホヤ、

降ってわいたあたしの花婿が、

新妻と初夜を迎えるべく、

寝台の上で、待ち構えていた。

## 2・ムコ殿は王子

出張から戻ったクソボケアンポンタン親父が、こともあろうにお土産と称して自国の王子をあたしのお婿さんとして連れ帰ったことを知った家の者たちは阿鼻叫喚。

執事のグラントだけが、片眉を僅かに上げただけで、あたしを抱っこしたままの王子に一礼し、

「お帰りなさいませ、若旦那様」

何事もなかったかのように迎え入れた。

それに習って混乱が見えるものの、伯爵家の使用人としての作法を思い出したのか、お帰りなさいませ！ と口々に皆、礼をとっていく。

それに軽く頷き、「初めまして、今日からお世話になります」と微笑む王子様。

ザ・悩殺スマイル。

大体、この国の王族は美男美女揃いで有名。

特に、北国出身の王妃様譲りの銀の髪と神秘的な紫紺の瞳を持つ皇太子は、年頃の乙女の憧れのマトで。

その王子に至近距離で笑顔を向けられ、うちの若いメイドたちは今にも失神しそうだ。

……高貴な生まれ育ちのくせに、彼は下々の者にも礼儀正しいと思う。

言葉つかいも綺麗なだけじゃなくて丁寧だし。

乗ってきた馬車から王子の分の荷物を運び出している従僕に、ありがとうと言うのも忘れない。

目が合う使用人一人一人に、こんにちは、初めまして、宜しくお願ひします、と笑顔の大盤振る舞い。

ていうか、何でこの人こんなに嬉しそうっていうか楽しそうなの。

少し見下ろす形になった彼をマジマジ見ていると、視線を感じたのか、ふとあたしと目を合わせ。

ほんのり頬を染めて視線をそらす。

いやいやいやアンタが恥じらう場面じゃないだろ！

初対面の勢いはどこへやったのよ、そんな反応されるとこっちは照れる……………」

「おーいその新婚さん、居間で茶あにしようぜ」

バカ親父のノンキな声に、誰が新婚さんだと怒鳴り返そうとして自分がまだ王子に抱っこされているのに気付いた。

ぬあッ！

どつりで、皆が“見てはイケナイものを見てしまった”と顔を赤くして目をそらすくせに、“でも怖いもの見たさなの”とチラチラ様子を窺ってると思った！！

「で、殿下っ、降りしてくださいよー！」

「嫌です」

「は!?!」

「それに“殿下”ではありません。名前で呼んでください」

ちよ！ なにその、プイって！

なに唇尖らせて拗ねてんのよ、ウツカリかわいいと思うところよ！

「と、とにかくですね、あたしはちっちゃい子じゃないんですから、この抱き上げ方はやめて下さい！」

ペシペシ腕を叩くと、真顔で返される。

「この方が貴女の顔を良く見ることが出来るじゃないですか」

な…っ!?

問題発言とジツと見つめてくる真摯な瞳に、かあ、と頭に血が昇るのがわかった。

「や、あたしの顔なんか見てもツマンナイデスヨ! のっぺりしてるし童顔ですし!」

思わず声がひっくり返る。

「……そうですね。私より歳上の女性とは思えないほど、愛らしくて居られる…」

溶けそうな微笑みを向けられて、その指先が硬直したあたしの頬をそっつと撫でた。

……ロリコン?

「違います」

呟きが漏れていたのか、笑顔のまま即否定される。

いや、自分で認めるのもヤだけど外見的に、あたしパツと見十代にしか見えないし。

哀しいくらいに凹凸ないし。

でも実年齢は二十六歳だし、だから犯罪にならずに手を出せるから、それであたしを見初めたのかと…、

あ。

そっぴやこの人さつき変なこと言っただけでなかったか。

自分が是非にとあたしのお嬢様になることを望んだとか何とか

「もつらぶらぶ〜？ カノンちゃんは面食いだっただねえ。お父さま嬉しいけどフクザツ〜」

茶化すような親父の声に、我に返る。

いつの間にやら居間のソファ、隣にはちゃっかり王子が座ってて。

ニンマリ顔の親父とニツコリ笑顔の王子を代わる代わる見る。読めねえ二人を前にして、不利を悟るあたし。

……ちよつと気分を落ち着けよう。

大体、婚約期間もなしに突然王子と結婚だなんておかしいし。

皇太子が式も触れもすつ飛ばして、しかも王位継承権放棄して、伯爵家に婿入りってありえなさすぎ。

何か裏があるに決まってる。

ちやらんばらん親父はこれでも国内外では有能な外交官だ。国政に関わること……？

あたしは魔女。

だから、伯爵家の跡取り娘というより、魔女としての生き方を優先している。

と、いうより、魔女として生まれたからには魔女として生きなければならぬ。

故に、世俗の事柄に関われない。

それが世界を揺るがす事象でない限り、関わってはいけないことになっている。

それが緋色の魔女の掟だから。

母様と結婚した親父はそれを重々分かっているので、あたしに裏事情を話さないのかもしれない。

だとすれば、いくら二人を問いつめたって、このありえない状況を納得することができる説明をして貰えるとは思えない。

よし、落ち着いた。

そうなれば、この茶番劇が終わるのを、どーんと構えていればいいワケだ。

そうよねー、これで大々的に世間様に発表しない理由が分かったわ。

きっと問題が解決したら、結婚したとかいう事実はキレイサツパりなくなるんでしょ。

うんうん、なら、王子様がお婿様だなんて滅多に出来ない経験、楽しませてもらおうじゃない。

だって、結構好みだし。

触られて嫌悪感なんてないし。

あの抱っこの仕方だけは、ごめん被るけど。

そう結論付けて、気が楽になったあたしはメイドが用意したお茶を美味しくいただく。

まったくもって、その考えが甘かったのをあたしが知るの、数

時間後のことだった……………。

母様が東国の出身のせいで、うちの入浴設備はこの地方では考えられないくらい整っている。

なんでも、浴槽と浴室がない限り、結婚なんてするものかと、親父に求婚されているときに言ったんだって。…他にも色々言ったらしいけど。

それで屋敷を改造して浴室を作る親父も親父、しかしそのお陰で恩恵を受けているあたしたちは母様さまさまだ。

通常の家で、浴室を作り毎日風呂を湧かすなんて大変だろうけど、そこはほら、

あたし、魔女だから。

水を呼び寄せ、湯にするくらい、毎日風呂に入れることを思えば苦でも何でもない。

母様が地下にコッソリ作った天水を溜めておく貯水槽もあるわけだし、そんなに負担でもない。

うちの勤め人たちも、風呂に入る心地好さと毎日清潔を保てる幸せに、もう他の所では働けないと言っくくらいだ。

特に女の子たちは。

あたしが調合した美肌の効果があるハーブも、人気の秘密。

今日は薔薇の香りを足してみた。明日みんなにどうだったか聞いてみよう。

ふんふん　と鼻歌なんか歌っちゃいながらご機嫌に自室へ向かう。と、あたしの部屋の前辺りで、メイドのひとり、リリアが拳動不審にうろうろしていた。

「リリア？　どうしたの、そろそろお風呂に行かないと、冷めちゃ  
うわよ」「

「はう！　お、お嬢様、はい、用事がすみましたらスグに！！」

もともと一生懸命だけどドジッ娘なりリアだから、何か手間取っているのかしらとそう思い、あまり遅くならないようにねと声をかけ、ドアを開ける。

と。

「ごめんなさいいいい！　と半泣きの叫び声と共に、勢いよく背を押されて部屋に転がり込む。

なっ……………、

「ちょっと、リリア！？」

膝をついた姿勢で扉を振り返り、閉められた向こう側でガチャガチャと何か金音がするのを耳にした。

おいコラ。

立ち上がって、ドアを開けようとする。

ガチリ。

硬い感触がして、ドアノブは固定されたように動かない。

なにい？

扉の向こうにいるはずのメイドに声をかけようとして、口を開いた瞬間。

「……カノンの？」

居るとも思っていなかった人物の声がして、あたしは凍りついた。おそろおそろ振り返り、目にしたのは、

ちょこんと、大人の男のくせに可愛らしい風情で私のベッドに腰掛けている、白い夜着を身につけた王子様、だった。

これって貞操の危機？

相手は書類上とはいえ夫、いやこの状況からして事実上も夫となるうとしているのは間違いなくて！

吹っ飛ばす、ぶっ飛ばす、ぶちのめす、

あたしが取るべき手段はどれ？

でも彼は夫として当然の義務を果たそうとしているだけであって、上記のことをすればあたしが暴力妻になるってことか？！

つつか、結婚て便宜上のことだったんじゃないの！

「いつまでもそんなところに居られると、せっかく温まった身体が

冷えてしまいますよ」

知らぬ間に側に来ていた、王子の耳に甘く響くその言葉と同時に腕に抱き上げられ、機能停止してる間に寝台まで運ばれる。

薄物の夜着の下すぐに感じる逞しい体にパニックになりかけた。ポスン、と柔らかくシーツの上に降ろされて。

固まっているあたしを覗き込むように、王子は床に膝をつく。眉を下げて困りまくってる顔をしてるだろうあたしに、優しく微笑いかけて。

「カノンどのの意思を無視して、躰を繋げようとは思いませんから、安心してください。

……急なことでしたし、まだ、貴女もそんな気分ではないでしょうっ？」

そんな気分でどんな気分。

ツッコミかけたけど、ヤブヘビになりそうだったのでコクコク頷くに留めた。

「ゆっくり、私を知って下さればいいんです。今は貴女の傍に居られるだけで……」

王子の言葉の意味の半分も分からないまま、コクコクコク首振り人形と化すあたし。

とりあえず、今は何もする気はないってことよね？

貞操の危機、回避！

ホツとしたあたしは、次に王子が言ったことにもうっかり頷いてしまった。

くちづけを許してくださいますか？

あれ、今のは頷いちゃマズインじゃないかと気付いたときには手遅れ。

王子の唇があたしのそれに触れていた。

驚いて身を引こうとしたあたしの首の後ろを、大きな手のひらで支え、更に深く唇を合わせてくる。

苦しくてもがき、息を求めて開いた隙間から、やわらかく侵入してくる、舌。

「ん、っ……ふ、ん、んー！」

くちづけって可愛いもんか、コレが！！

歯列を割り、上顎を舐め、逃げるあたしを追いかけて絡めとって。

見開いたあたしの瞳に間近に写る、王子の紫闇。

熱を秘めたその魔法の瞳に吸い込まれるようにして、あたしの意識は遠退いた。

包み込む温かな腕と、

「何処まで我慢できるかな……」という、少年めいた、王子の眩きを耳に。

UNU

### 第三話 母上来襲

ふわふわと、羽根が頬や脛に触れる感触がくすぐったくて、あたしは身動いだ。

んん、と唸ってまだ半分眠ったままソレから逃げる。

なのにしつこく追いかけてきて、クスクスと笑うのだ。

……ん？ 笑う？

「……ふ、むう？ ……んんッ!？」

羽根だと思っていたやわらかいものに口を塞がれて、あたしは完全に覚醒した。

油断している唇を食んで、僅かに開いた隙間から、中に侵入してくる他人の舌。

「っふ…、んんー！！」

バシバシと覆い被さっている奴…、ていうか目が覚めてそれが王子だって分かったけど、彼の腕や背中を叩くものの、全く気にした風もなく、深く唇を合わせてくる。

ピチャリ、と濡れた音、逃げる舌を追いかけて、絡め捕られ、擦り合わされる唾液。

「ん…っは、うん…ッ…ん…っ」

あたしの口内を好きに味わいながら、王子は宥めるように髪を撫で、少しの重さしか感じない程度に、身体を寄せて。触れる唇の角度を変える度に空気を求めて喘ぐあたしの息が熱っぽくなる。

トロリと溶けたあたしの瞳を覗き込む、宵闇紫。

笑んで、名前を囁きながらも一度羽根のように唇に触れてくる。……… どういうわけか、あたしは抵抗出来なくて。

「…カノンどの …、」

囁く甘い声に、また、意識を持って行かれそうに、なる、

「だだだだめです、アイラ様っ、まだお二人ともお休みで …… ツッ  
!..!」

あたしをおバカにしそうだった桃色の空気を突き破り、半泣き声のリリアの声が入って、ハテナ？ と感じる間もなくぶち壊されそうな勢いで開けられる扉。

真っ赤な嵐が現れた。

「オラア 餓鬼ども！ 昼飯の時間だぞ！」

サラリ、肩に落ちる真っ直ぐな黒髪を払って、ニヤリと笑つ、緋

色の着物姿の小柄な女

「かつ、かあさまっつっ!？」

あたしの叫びに、え。と呟く王子。

そう、遠い東の故郷にいるはずの母が、そこにいた。

### 3・母上来襲

へびに睨まれたカエル。

今のあたしはそんなカンジ。

「アレのすることだから今さら驚きゃしないけど、相手が相手だろ？ コイツも何も言っ来ねーから、つい無茶して戻って来たんだ」  
「よ」

あくまでもにこやかに母様は言った。

通常的手段なら半年かかる距離を一瞬で移動したことを軽い感じで無茶という、それがあたしの実母。

腰まで真っ直ぐに伸びた黒髪、何処までも闇色の瞳。

あたしの姉くらいに見えるが、これでも一族イチの実力者。

相手が王子だろうと国王だろうと母様が態度を変えることはない。

テラスの椅子に女帝然と座り、向かいに腰掛ける王子とあたしを見つめて、ニヤリ微笑んでいる。

きよわい……。

ちなみにアレというのはバカ親父のことだ。

母様に、

“カノンちゃんが王子さまと結婚したよ、婿養子に来てもらったからね（ハート）”

と事実関係だけ簡単に伝えたらしい、既に仕事へ行った親父にあたしは呪いの念を送った。

柱にでもぶつかるがよい。

「御挨拶が遅れて申し訳ありません。急なことだったものですから……」

本日も麗しく微笑んで、はにかみながら母にそんなことを言う王子に、あたしはなんとも言えない視線を向ける。

王子は、あんな現場（いや！ 何もしてないけどね！？ し、してないよね?!）に踏み込まれても動じることなく、素早く起き上がり母に対して貴婦人の礼を取っていた。寝間着でだけど。

あたしは未だ固まったまま。

大体、起き抜け濃厚キスのダメージからも回復できていない。っていうか、何で王子と一緒に寝てたんだっけ？

昨夜…昨夜は確か……、

失礼します、とブランチを乗せたワゴンを押しながらテラスへや  
って来たリリアを見て、思い出す。

「りりりア~~~~昨夜はよくもっ」

あたしの声にビクッ、とおののいたリリアがお約束通りなんにも  
ない所でつまづき、ワゴンをひっくり返す　より早く、母様がそ  
ちらへ目を向けた。

倒れかけていたワゴンは一瞬浮いて、何事もなかったように床を  
滑る。

はわわ、すみませえん、と胸を撫で下ろしているリリアに代わり、  
控えていたグラントが食事をテーブルに並べ出した。

おそらく手早く食べることが出来るように気を使ってくれたんだ  
ろう、シェフの特製サンドイッチ。

好物なのに、今のあたしが食べてもきつと、味なんかしないだろ  
う。

だって……母様の目がっ…目がー！

「さて永和<sup>トウ</sup>。私に報告が来なかったのは何故だい？」

魔女名を呼ばれて、あたしの背筋が伸びる。

「申し訳ありません、長。私も現状把握が出来ておらず、事がはっ  
きりしてからお伝えしよう」と

っていつか、混乱しすぎて忘れてたんだけど。

そんなことはお見通しだよ、と長の目はそう言っていたけれど、

取りあえずあたしが答えたことで筋は通ったことになる。

問題は、王子があたし 緋色の魔女と結婚するということ、どこまで理解しているかってことで……、

「……殿下。貴方はカノンを嫁に迎えたのではなく、魔女永和の婿になったことに相違ありませんか」

母娘のやり取りから魔女長と一族の一人の会話になったあたしたちを興味深げに眺めていた王子は、その問い掛けに怯むことなくニコリと笑う。

「ええ」

「それに伴う義務については？」

長の畳み掛けるような確認に、少しも翳ることのない笑顔は流石王子と言っべきか。

小さく首を傾げて、あっさり頷く。

「存じております。」

守るものが一国から世界になっただけで、たいして違いはありません」

「……なんか言った、

なんかサラッと物凄いこと言ったよ、このひと！

「……貴方にその覚悟があるなら我々は歓迎しよう。緋の一族へようこそ、我が息子」

当事者の一人なのに置いてけぼりなあたしに、あゝあ、という母様の半笑いの視線が向けられた。

「よかつたねえ、カノン。願ってもないムコ殿じゃないか。あんたに押し付ける形になっちまった伯爵家の後継ぎも、さっきの様子じや問題ないみてえだし」

母様誤解！ 誤解だからソレ！！

やってないもん、まだ清らかだもん！

ぶるぶる首を振る私をまるで無視、用件はすんだと食事を詰め込み出した母様に、王子が嬉しそうに提案する。

「母君様はいつまでこちらに？ お時間があれば、私の両親にも是非会って頂けませんか」

……あんたの両親で王様とか王妃様とか言わないか。

そんな簡単に会ってとか言っているのか。

しかし母は面倒そうに、そうだねえ、と呟き、

「以前お会いしたのはカノンが生まれる前だし、うちのボンクラがいつも迷惑を撒き散らしてるお詫びもしなきゃな」

こつちも簡単に言う。

そりゃまあ、母様は親父の奥さん、てことは伯爵夫人でもある。

王宮にだって行ったことはあるだろう。

あたしと同じく一族の掟に縛られているので、世間一般の貴族の奥さんの務めは果たしていないけど。

それでも構わないと口説き落とした、母にベタ惚れの親父は置いていて、了承した祖父母も大概だと思っ。

しかも、生まれた子ども（あたしのことね）も魔女だし。  
母様は魔女長になっちゃったから別居状態だし。

……うちって何かヘン？

さらに付け加えるならば、王子が婿養子、と。

あたしがあらためてこの状況の特異さに目眩を覚えていると、

「アイラちゃんっ！ アイラちゃん帰ってるの！？ アイーラー  
ちゃああ〜んっっ！！」

聞き苦しい男の声が響いてきた。

げえ、という顔をした母様が逃げる体勢を取るより早く、矢のよ  
うにテラスへ飛び込んできた親父が母様に抱きつく。

「三ヶ月と十六時間ぶりっ！ 会いたかったあー！」

「毎日水鏡で話してるだろうが。…ためえ仕事はどうした。まだ帰  
って来る時間じゃねえだろう」

「何かね、よそ見てないのに柱にぶつかったり、上から僕を狙っ  
て物が落ちてきたりして不吉だから帰れって言われたんだよ〜。で  
もラッキー！ 昨夜の今日ですぐ帰って来こられるとは思わなかつ  
たよ、アイラちゃんっ」

ムギュー。

母様は嫌そうな顔をしつつ、取りあえず親父の暑苦しい抱擁を受  
け入れている。

しかし。

あたしはソロリと立ち上がった。何故かふむふむ頷きながらバカ夫婦を眺めていた王子を急いで手招きする。

首を傾げつつも、夫婦の再会の邪魔になると思ったのか素直に歩いてくる王子。

バカ親父のうっとうしい睦言に背を向けて庭へ出る。

しばらくして。

「ウゼえんだよっ！ てめえはいい加減落ち着くつてことがねえのかッッ！」

母様の怒号と共にテラスの窓が揺れる。

逃げ遅れたらしいリアの間抜けな悲鳴が聞こえたが、そのないグラントがなんとかするだろう。

ふう、あやうく巻き込まれるところだった。

母様が爆発するとしばらく近づかない方がいいから、さて、どうしようかな。

「あのお二人はいつもあのような感じですか？」

先程までいた場所を振り返りつつ、楽しそうに王子が聞いてくる。

「あたしが生まれる前からあんなですって。飽きないよね」

クールな母様に、デロデロな親父。

うっとうしいほどの愛情表現をぶつけてくる親父をキレた母様がぶちのめす。

毎度のことだ。

母様が結婚したのだって、出会ったその日にプロポーズされて、五年間追いかけて回されてどついても踏んでも嫌いだって言ってもへこたれない親父に根負けしたからだって言っし。

あたしが生まれたんだから、一応、母様にも愛はあるはず…だと  
思いたい。

「情熱的ですね。見習わなければ」

いや待って、待って、見習うってナニ!?

「カノンどの」

どきいー!

周りに咲き誇る花々に負けなくらいの美しい笑顔を見せて、あたしの手を取る王子が、とても危険な生き物に見えて後退りしそうになる。

魔女の本能が逃げるとささやいている。  
が、しかし、王子と目を合わせた途端金縛りに合ったように動けなくなるのだ。

どういうことよ、彼から魔力なんてこれっぽっちも感じられないのに、昨日からあたしはヘン。

やっぱり26年マトモな男と付き合ってたのが悪かった?

そうよね、あたしの周りにいたやつらって言えば同族か敵か魔族

かっつてくらいだし、魔女っただけで敬遠されてたし、免疫がないのは仕方ないっつてもよ……。

ゆっくり近づいてくる、王子の綺麗な顔に、ウツカリボンヤリ見とれて

「殿下っ！ お腹空きましたよね、さっきロクに食べることが出来ませんでしたものね！ 実はサンドイッチちよるまかしてきてますのよ！ お食べになります！？」

ナプキンで包んだブツで顔の前を遮る。

王子がちえ、みたいな顔をしたが知らんぷりだ。

アブねーアブねー。危うくまたキスされるとこだった。  
何回されてるのよ。

嫌な訳じゃないけど。

嫌じゃないことが問題のような気がする。

庭の花を眺めながら、後ろをついてくる王子をチラリと窺う。

陽射しにキラキラ輝く銀色の髪。

明るい場所では、極上の紫水晶みたいに明るく揺らめく瞳。

高貴な人にあるまじき、そっけない白シャツにグレイのズボン、  
そんな格好でも王子は王子。

そこにいるだけで視線が向かっつていうか、引き付けられる存在感。

これがあたしの夫？

……やっぱり何か、騙されてる気がするんだけど……。

っ  
っ  
っ。

**第四話 恋に落ちた王子様（前書き）**

過去話。王子の語りになります。

## 第四話 恋に落ちた王子様

「じゃあ王子、今休暇中なんだ？」

大きな瞳をクルクルさせて、見上げるひとに、笑みを返す。

そうだよね、將軍さまだもんね、うちのバカ親父にすら仕事はあ  
るのに変だなと思ったの。とサンドイッチを頬張りながら頷きつつ、  
小さな手で最後の一切れを掴み、はい王子のぶん、と私に差し出し  
てくる。

何故こんなに可愛らしいんだろうと思う。

艶々した黒髪は砂糖菓子のようにふわふわしていて、触れば淡く  
溶けてしまわないか心配になる。

黒々とした丸い瞳はよく見ると金と翠が散っていて、それだけで  
魔法のようだ。

これで自分より歳上の、類い稀な力を有す魔女だなんて、この目  
で見えていなければ信じられなかっただろう。

公式な場では緋色を身につけることを定められている彼女は、家  
の中だということもあるのか、胸の下でリボンを結んだだけの簡素  
な薄紅のドレスをまとっている。

妙齢の女性なら結び上げるのが常になっている長い髪も、髪留め  
で耳横部分を留めているだけで、あとは背に流されたまま。

少女めいた容姿によく似合う。

貴族の姫君なら常に華美なものを好む印象があった私は、その素っ気ないともいえる格好に、ますます彼女を愛しく思った。

彼女が自分の妻。

まだ信じられない。

この幸運。

彼女を目にするだけで自然と笑みが浮かぶ、そんな自分は他者から見ると、さぞかし奇異に写ることだろう。

変な男だと思われていないだろうか。それだけが心配だ。

彼女は私が詐欺のような手口で夫となったことを、政治的な理由があるものだと考えているようだが、実のところ、それは正解だ。まだ話すことは出来ないが。

しかし、こればかりは知らないだろう。

私がカノン姫を四年前から知っていて、ずっと想っていたことなど。。。

#### 4 . 恋に落ちた王子様

まるで、彗星のように彼女は目の前に現れた。

黒塗りの魔術杖に跨がり、今まさにぶつかり合おうとしていた両軍の真中に。

「両軍、退け！ この争いは我らが預かる！！」

緋色の着物を翻し、大地に降り立つと同時に、響き渡る声。小さな身体の何処からそのような覇気が出るのかと、不思議に思うほど、意識が惹き付けられた。

緋の魔女のことは知っていた。

修行により力を持つ魔術師とは違い、血によって力を継承する、一族。

その力は個人のためではなく、均衡を保つために使われるという、世界の調停者。

この世のどんな権力者であろうと、彼女等が膝を折ることはない。中立の立場を保ち、こんな、国と国との争いに口を出すこともないはず、

合戦の号令を待っていた兵に一時待機の指示を出し、取り敢えず魔女の動きを待つことにした。

が。

静まり返った場に、ヒュッ、と弓がしなる音。

あちら側の誰が逸ったものか、一本の矢が射たれたのを合図のよう、豪雨のように、矢が降り注ぐ。

我々の元に、

あの、小さな魔女の元に

咄嗟に飛び出しそうになった私の身体を従者が慌てて抑える。飛び出しても、この身を盾にしても助からないのは見えていたのに、何故動こうとしたのか、その時の自分には分からなかった。

周りの者が私を囲み、襲い来る矢から守ろうと頭上に盾をかざす。

魔女は微動だにしない。

ただ、杖を持った右腕を天に突き上げたただけだ。

瞬間、ゴツ、とドーム状に炎の壁が出来る。

そして魔女を中心に、こちらの軍に至るまで包み込んだその壁に阻まれ、矢は全て燃え尽きた。

魔女がクルリと小さな手のひらで杖を回し、空を凧ぎ払う仕草をする。

ざあ、と風が吹いたあとは、何も、残っていなかった。

燃えた矢の灰も、炎の一欠片も。

その場にいた全ての者の思考が停止し、今起こった事を理解するより早く、魔女が動く。

杖の先を敵軍に向ける、と同時に緑の波が彼らに襲いかかった。意思持つ生き物のように、緑の草が伸び、兵等の手足に絡み付いて。

派手な詠唱も身振りもなく、ただ意識をそちらに向けただけ。それだけで、彼女はその場を支配した。

城の魔術師が術を使う時に感じる違和感もなく、世界を動かすその力。

調停者。

バランスを保つ者。

世界の代弁者　　。

一人の狂える魔術師が、その戦を裏で操っていた、と知らされたのは全てが治まったあと。

禁呪に手を出し、外法を行い、望んではならないものを求めたその魔術師がどうなったかまでは、語られなかった。

もとより、我が国にとっては望まぬ戦。ただでは起きない外交官の手腕により、幾ばくかの有利な条件をあちらに飲ませ、和睦となった。

それで終わりだった。

自分の胸に残った、小さな、星の瞬きのような、光るもの意外は。

言葉も交わさず瞳の交叉すらなかったのに、忘れられない印象を残したあの魔女に再び出逢ったのはそれから一年が過ぎた頃。

我が父王の生誕祝いの舞踏会で。

異国風の着物ではなく、我が国特有のドレスを纏い、名のある姫君のような出で立ちで、つまらなさそうにグラスを傾けていた。

鮮やかな緋色。

最初にそれが目に入り、それが間違いなく彼女だと分かった瞬間、何も考えられなくなった。

何故ここに。

呆然と彼女を見つめていると、誰かに呼ばれた風に首を傾げて、移動するのが見えた。

背の高い、赤毛の男性と腕を組み、玉座へ。

その男性がラシエレット伯爵だというのは、燃えるような髪色で分かった。

それと同時に、卿に関する情報が浮かび上がる。

彼は確か、異例の婚姻をしたことで有名で、そもそも、あの戦の時に、我が軍が緋の魔女の登場で浮き足立つ事がなかったのも、他国より彼の一族に対する情報があつたからで、ラシエレット伯爵は、緋の魔女の一人と結婚をしているのだ。

その存在は知られていても、実像は謎に包まれている彼女たちが、僅かでも身近に感じられるそれが理由。

ラシエレット伯の人柄と政治的手腕があるからこそ、彼は王宮で一目置かれているが、通常なら魔女と結婚した貴族など見向きもされないだろう。

確か彼には息女がひとり

彼女が？

いやしかし、令嬢は私より歳上のはず。

彼女は十四、五歳ほどにしか見えない。

さざめくように、自分の周りにまとわりつく者たちと、皇太子に相応しい態度で当たり障りなく言葉を交わす。

その間も、自分の瞳が彼女を探しているのが分かった。

何故こんなに気になるんだろう。

胸が苦しい。呼吸の仕方を忘れたように、意識しなければ息も出  
来ない

何故？

「兄上、どうかさされましたか」

気分を落ち着かせようと、人波から離れてバルコニーに出た私を  
サウスリードが追ってくる。

「まるで夢の中にいるような顔をしていらっしやいますよ」

水の入ったグラスを渡されながら楽しげに言われて、熱い気がす  
る頬を押さえた。

夢の中？

確かに、こんなふうにもう一度会えるなんて思ってもみなかったから、

「兄上？ ホントにどーしたのさ、熱でもあんの？」

社交用の顔からやんちゃな弟の口調になったサウスリードがペタリと私の額に手を当ててくる。

熱……。

そうかもしれない。

具合が悪いから、こんなにも動揺するんだ、きっと。

名も分からない魔女から、ラシエレット伯の娘（推定）だということが判明した。

伯を通せば直に会うことも出来る

と、無意識に考えて、

何故会うことを望んでいるのだろつと自問自答する。

「……あ。魔女の姫君」

ガシャン。

持っていたグラスが手を滑った。

「ベタだな、兄上……」

有り得ない失態に呆然としてみると、呆れ顔の弟と目が合う。

ニヤリと口の端を上げたサウスリードは内緒話をするように顔を

寄せ、肩を組んできた。

「ずっと彼女のこと見てたでしょ。珍しいよね、兄上が自分から女性を気にするなんて」

「……………」

「ああいつのが好みだったとは意外だけど、いいじゃん？ ラシエレット伯爵令嬢なら迎え入れるにもそんなに害はないし」

「……………なんの話だ」

「ん？ だから未来の王妃様の話。」

未来の……………？

「一目惚れしたんでしょ、ようするに」

あっけらかんと言いつつ放った弟をジッと見下ろした。

一目惚れ、とは何だ。

……………私が彼女のこと、を？

え……………。

恥ずかしながら、弟に指摘されて初めて、自分の気持ちを自覚したのだった。

十四、五歳に見えた彼女が実はとくに成人している年齢で私より三年上の二十三歳、普段は社交界に出ることはなく、あの日は母親代わりに伯爵のパートナーとしてやってきたらしい、という情報は全てサウスリードが集めてきた。

婚約者はいないようだし、とっととお手つきにしちやえと無責任にけしかける弟とは逆に、私は自覚したと同時にその想いを封印することに決めた。

彼女がただの伯爵令嬢なら問題はなかった。

父王に話して、議会の承認を得て、伯爵家に王子妃内定を伝えればいいのだ。

しかし、彼女は緋の魔女。

個や家や国に所属せず世界に奉仕することを定められた一族の娘。

自分一人の物に、と望んでよい相手ではない。

少しでも彼女のことが知りたくて、緋の魔女について調べた私が出した結論だった。

あるいは、自分が皇太子でなければと思わなかったわけではない。そして、一瞬でも生まれ持った責任を放棄するようなことを考えた自分に驚いた。

言葉すら交わしたことのない、彼女がどんな女性なのかも本当には知らない、なのに何故、こんなにも惹かれるのか。

戦場にひとり、凜と立ったあの姿が魂に焼き付けられてしまった。

胸の奥に静かに瞬く想いは消えなくて、どんな女性を薦められても、頷くことはできず、月日がたった。

頼みもしないのに、サウスリードが彼女に関しての情報を持ってきたりして、様々なことを知るたびに、会いたいと思ってしまう気

持ちを抑えられなくて。

正直、心労をかけている両親や事情を知っている人々に申し訳ないと思うのだが、緊急避難的なこの結婚をラシエレット伯から提案されたとき、元凶である人物に感謝すら覚えた。

初めて直接に言葉を交わし見つめることができた彼女は、やっぱり歳上とは思えないほど小さくて可愛らしく、楽しいくらい元気な女性で。

ますます心を奪われて、この一方的な想いは勘違いでも思い込みでもなかったと確信する。

何も知らない彼女には、申し訳ないと思うけれど　このチャンス  
を逃したくない。

夫として傍にいられる間に、彼女の心も手に入れてみせる。

警戒心の強い子猫のようにジッとこちらを観察する、まだ言葉の上だけの妻に、微笑みかけた　。

つづく。

## 第五話 芽生えるもの

はあ、と本日何度目かの悩ましげなため息をついた王子に、あたしは首を傾げつつ訊ねる。

「どーしたんですか、辛気くさいため息ばかりついて」

何となく習慣になってしまったテラスでの朝食、ミルクたっぷり  
のティー・オ・レをすするあたしをじっと見つめて、憂いが増して  
更に麗しい夫はポツリと呟いた。

「休暇、明日までなんです……」

「ああ、いつになったら仕事行くのかなと思ってました。長い休暇  
でしたよねえ、ダイジョブだったんですか？ こんなに長く留守  
にしています」

けろりと答えるあたしに拗ねたように向けられる瞳。

「……カノンどのは寂しくないんですか、私と離れるのが」

いやいやいや大げさな。

ていうか、一週間前は知らない同士だったじゃないの。  
しかも偽物夫婦で寂しいも何も……、

って、だからそういう目で見るのはやめーいッ！

ずいぶん慣れたとはいえ、心臓がね、動悸がね、あわわわわ、

「そついえばまだでしたね…?」

「は？ なななにがですかにゃ!?!」

噛んだ。

テーブルに少し身を乗り出した王子が微笑んで、クルクルと私の髪を長い指先で弄ぶ。

スルリと巻き付けた髪を解いた指先は、頬をなぞり、唇に触れてあたしは、一対の紫水晶に囚われたまま、瞬きすらできない。

「…おはようございますの、キス……」

引き寄せられるまま、唇が触れる　刹那、あたしは魔術杖をかざした手のひらに呼び出し、掴むと即座に上空に結界を張った。

ドン、と押し寄せてきた風に結界がたわむけれど、そんなくらいではあたしの術は壊れない。

それに相手はわかってる。

あんのクソガキっ！

怒鳴ろうと顔を上げようとしたけれど、でかいものに視界を塞がれてそれは叶わなかった。

「何者だ、無礼な」

低い恫喝。

いつの間に剣を抜いたのか、王子が見たこともない厳しい顔で、空に浮かぶ黒い点を睨み付けていた。守るようにあたしを背後に隠して。

えっと、そんなことしなくてもダイジョブなんだけど、

……ちょっとだけ、初めて見る凜々しい王子にときめいたのは内緒。だって、魔女のあたしが誰かに守られるのなんて、初めてなんだもの。

くいくい、と王子の袖を引っ張って、危険がないことを訴える。

王子は気配をゆるめて、だけどあたしに寄り添ったまま、ソレが降りてくるのを黙って見ていた。

滑るように庭に舞い降り、緋色の上衣をひるがえしてナナメにこちらを見やる、少年。

あたし曰くクソガキ、

王子曰く無礼なやつ。

「興醒めだな。なにソイツ？ 永和」

緋の一族の一員で、ついでにあたしの従弟であるカルマが、不機嫌にそうつぶやいた。

「行き遅れが結婚したって聞いてよ。その物好きの顔を見に来てやっただよ」

見に来ていただかなくても良かったんですけど。

相変わらずぶてぶてしくこちらを見下ろす（ムカつくことにこのクソガキには二年前身長を抜かされたのよ）カルマはわざと目の前の王子を無視している様子だ。

失礼な子だなあ、親戚として恥ずかしいよ、お姉さんは。

「カノンどの……彼は？」

まだあたしを庇うように立っていた王子が少し身を屈めて、あたしにささやく。

「あ、ごめんね王子。ビックリしたよね、この子は緋の魔女の仲間です、あたしの従弟なんです。」

「礼儀知らずでホントごめんなさい」  
「イトコ……」

ひそめた眉も美しいってどうなの、我が夫。

彼が身を屈めたことで間近になった美貌に今更ながら少し見とれる。

まっげながー。

キスするときはいつも突然で、そんなことにまで気付いてなかつ

たけど。

ていうか目えつぶっちゃうし。

ってなに考えてんの、あたし！

おかしなことを思い出して挙動不審になったあたしに気付いたのか、ふ、と王子の瞳がこちらへ向けられる。

柔らかく笑むそれに、あたしはいつも囚われる。

なんか、こつ、ジタバタしたくなるっていうか。

落ち着かない気分になるのよ。

今度本格的に王子が魔眼保持者じゃないか調べてみなくちや。

「…っおい！ 客に茶も出ないのかよ！」

堪え性のない子ども丸出しで、カルマが怒鳴る。

「あーもううるさい。あんたがいつ客になったのよ。毎度突然現れ  
てはケンカ吹っ掛けるヤツを客とは呼ばんわ」

「お貴族暮らしで腕が鈍ってないか確かめてやってるんじゃん」

「つたくもー、くそ生意気なんだから。」

あたしより十歳年下のカルマは、これでも一族の中ではかなりの術者だ。

あの母様に、もう少し経験さえ積みば最年少幹部になれるだろうって言われてるくらいだから、その実力は押して知るべし。

だがしかし。

こうしてあたしに意味のないケンカを売って来る間は、幹部になんてなれっこないわよ、クソガキが。

「すまない、客が来たからお茶の用意を頼めるだろうか」

あたしとカルマが睨み合っている横で、王子がおっとりとメイドに声をかける。

やだ、王子に気を使わせてどうするのよ、あたし。

そうよ、ここは大人の態度を見せないと！

「取りあえず座りなさいよ、カルマ。」

それからちゃんとご挨拶してちょうだい、ええと、あたしの……  
旦那様、の、イーディアス様よ」

いつも冗談で我が夫とか言ってるけど、あらためてこんな風に誰かに紹介すると何故か照れる。

ちらりと王子を窺うと、花が綻ぶようなフンワリした笑顔であたしを見てるもんだから、また心臓がジタバタしそうになる。

ダメだ、病気かもしれない。

怪しい動きをする心臓を必死に落ち着かせていると、ガタン！と荒く椅子に腰を下ろしたカルマが、見下したような目を王子に向けた。

「……ずいぶん見栄えする財産泥棒だな。アンタ、魔女と結婚するなんてよっぱど金に困ってるの、もしくはこんな成長不良の女が好きって人種？」

「ちょ…！ カルマ、あんたねえっ」

「カノンどの」

よりによって誰に対して暴言を！

激昂しかけたあたしを、王子の落ち着いた瞳が宥める。

恥ずかしすぎる、とことん礼儀知らずがあたしの従弟……！

「だって王子、」

「かまいませんよ。大事な実の姉ともいえる従姉がいきなり現れた男と結婚なんて、心配するのは当たり前です。盗られた気がするんでしょう、きつと」

そんな可愛い神経してないよ、こいつは。

「でも失礼過ぎます。あたしはいつものことだから良いけれど、初対面の王子にまで！

一族はどういう教育してるんだって思われちゃうじゃないっ、このバカ！」

刺々しい目付きで自分を睨んでいるカルマに対し、あくまでも王子は大人の態度。

「男の子にはよくあることですよ。全てのこと反抗的になってしまふというのは」

「ええ〜？ カルマは生まれたときから常に反抗的ですよ、っていつか、王子にもあったの、そういう時が？」

優しくて温厚な（勿論それだけじゃないって分かってるけど）王子の反抗期、興味津々で訊ねると、彼は首を傾げる。

「どう…だったでしょう。先にすぐ下の弟が問題をおこしていたから、私は反抗した覚えがないですね……」

ほらやっぱり〜。

こいつが失礼なのは生まれつきだわ。

「……無視してんじゃねえよ、この色ボケ」

ガツン、とあたしが座っていた椅子の足を蹴って、カルマが注視を求める。

いつ……、だからガキだっつもの！

衝撃に打った腰を押さえていると、気遣わしげに王子があたしの背を撫でてくれる。

少し眉をひそめて。

「いくら身内でも、あまり私の妻に失礼なことはしないでくれないか、カルマどの」

「……はあ？ なにスカしてんの、あんた」

白けた様子を隠さず、馬鹿にしたような笑いを見せる。

っていつか、なんでここまで王子を敵対視してんのこの子。

いつもは気持ち悪いくらい、あたし以外には猫かぶるくせに。

やっぱりアレ、気に入らないあたしの旦那様だから、おんなじよ

うに気に入らないのかしら。

だからと言ってこの態度は許しがたい。

あたしは出したままだった魔術杖をカルマの頭に振り下ろす。

通常なら避けられるはずのその攻撃をカルマが見事に食らったのは、王子に気を取られていたせいか。

「っつてえ！ 何しやがるこの貧乳！」

「お黙りこのクソガキ！」

本来なら例え緋の一族だとしてもあんたのその失礼な態度で長から幹部一同までお詫びに来なきゃいけない相手よ王子は！ だって王子なんだから！」

「カノンどの、かまいませんよ。

子どもの言うことですし、私もここに居るときは、ただの貴女の夫ですから」

王子、王子なのに心が広すぎるよー！

なのに、カルマときたら…！

「王子って……バツカじゃねえの、そんなアダ名……」

「アダ名じゃないわよこのバカ、バカはテメエだ！」

更に鉄拳制裁を加えようとしたあたしをやりわり後ろから抱き止める。

失礼にも険しい目をしたバカルマに穏やかに王子が告げた。

「失礼、カルマどの。最初にちゃんと名乗るべきだったね。私  
はイーディアス・グラム・フォート・ブランシェリウム……今は、

トワ・ラシエレットの姓を頂いているが、少し前まではこの国の王位継承者だった」

ギユツと不機嫌にしかめられたカルマの眉が、訝しげになり、次いで、間抜けに弧を描いた。

「銀の皇太子…？ マジかよ」

マジですよ、バカ、己の愚かさを噛み締めよ！

「彼女と結婚するために、皇太子では無くなったけれどね。……

君の大事な従姉の、夫として認めてもらえるかな？」

いやだから、カルマに認めてもらうことなんてないってば。

てか、大事な従姉なんかじゃないし。

「……勝手にすれば？」

別に誰がその幼児体型の旦那になるうが、一族に迷惑かからなきゃ俺はかまわねえよ。

あんた、ホントに物好きだな」

「君がそれを言うのかい？」

吐き捨てるようなカルマの言葉に、謎めいた笑みを返す王子。立ち上がったカルマは舌打ちして、緋色の着物を翻し、杖に跨がった。

え、あれ、帰んの？

「せいぜいその王子さまに捨てられねえようにするんだな、乱暴者！」

って最後までムカつく捨て台詞か。

「ホントに何しに来たんだろ、アイツ」

空に小さくなる点を見送って、あたしがつぶやくと、王子がクスリと笑みを漏らす。

「だから、最初に言った通り、私の顔を見に来たんでしょっ」

物好きの顔を……って？

それだけのためにわざわざ？ 物好きはどっちだ。

「カノンドの」

「ふい？」

呼び掛けられて、見上げると柔らかく触れる唇。

不意打ちのそれに驚いてパチパチ瞬きをすると、悪戯っぽく王子が笑った。

「…さつき、いいところで邪魔されましたからね。その分の利子を頂いても？」

「っえ、んっ、ちょ……」

腰から抱き上げられて、膝の上に乗せられる。

角度を変えて、押し当てられる唇を、どういったわけか拒めず。

拒もつともせず。

溶けるようなキスに慣らされて、それを心地好いと感じるあたしがいた。

つづく。

## 幕間 王子の独白

昼からカノンどのの薬草室を見せてもらう約束をして、私は用意された自室に戻った。

もう少し彼女を感じていたかったが、メイドを驚かせてしまったので仕方ない。

あのワゴンをひっくり返したメイド……リリアと言ったか、彼女が現れなければ、テラスで事に及んでいたかもしれない。

危ない危ない。

カノンどのあの自覚のない可愛らしさはどうにかならないものか。

いつもケンカ売ってきてムカつくガキなんですよ！ と息巻いて従弟に対する文句を言っていた唇を塞いだのは、嫉妬から。

彼女を想う気持ちが一番上手く現せていない彼には悪いけれど、どんな感情でも他の男に向けられたくない と思ってしまっほど、溺れている。

まだ一週間。

……もう一週間。

ただ想っているだけで良いと考えていた自分が信じられない。

そばにいればいるほど欲しくなって  
……

彼女を利用している自分が嫌になる。

ズキリと痛む胸を見た。

シャツを開くと、心臓の上に浮き出た紋様が目に入る。

先ほど、生まれ出でた時に与えられた自らの名を口にしてしまったせいか、彼女の名に守られてより薄くなっていたはずのそれが少しだけ濃さを増した気がする。

いつまで持つか。

偽りの婚姻が、本物にならなければその時は。

……願わくば、真実が知られる前に、彼女の心が私に与えられま  
すように……。

幕間・閉

## 幕間 王子の独白（後書き）

前半終了でございます！

当初、ただのロイヤルチック新婚ラブコメとして書き始めたのに、何故かあれよあれよという間に伏線張りまくリーの謎混入の、思わせ振りのお話になっちまいました。

サイトで連載しているものを投稿させていただけのために、これ以後投稿ペースが落ちますが、引き続きお付き合いしていただけると嬉しいです。

取りあえず、双方向らぶらぶを目指して…！

ご感想、ご意見などございましたら是非お寄せくださいませ。

## 第六話 お婿様の秘密（前）

「お初にお目にかかります、義姉上」

ここ一週間で見慣れたあのひとによく似た顔が、意地の悪い笑みを浮かべて、あたしを見下ろしていた。

どういう反応をすれば良いのかしばし迷ったあと、取りあえず無難にドレスの裾を捌いて、淑女の礼をとる。

「…ご招待、有難う存じます、サウスリード殿下」

クスリと笑った少年はあたしの手を取り口づけた。

彼より少し低めの身長、

彼とは違う、父王譲りのオレンジっぽい金の髪、

彼より明るい董色の瞳。

いつも穏やかな光を湛えている彼とよく似た顔が、悪巧みをしているような表情を私に向ける。

王宮の奥深く。

魔力封じの結界の張られた塔の上で、  
あたしは、

あたしの夫の弟に拉致されていた。

## 6・お嬢様の秘密（前）

「お迎えに上がりました、上将」

あたしと同じ歳くらいの青年が畏まって我が家を訪れたのは早朝。

王宮右軍の黒衣をまとい、単騎で。

王子の迎えには無防備なくらい。

まあ家は丘の上ででんと建っていて、城からはそんなに離れていないしね。

警備の者もいるし、母様が作ってあたしがアレンジした結界も実は張ってある。

うちにいる限りは、安全なの。

かえってゾロゾロ来られる方が目立つかもしれない。

だってさ。

今日改めて、王子の軍服姿を見たわけですが。

……カッコイイんだもの…！

王子が所属する右軍の制服は、黒と銀を基調にしたデザインで、彼は一般兵より長めの上衣、で装飾が多めの将服になっている。でもって紫紺のマントを羽織って。

それが王子の瞳に合わせたみたいにぴったりで。

あたしがもちよつと若かったらうちのメイドたちみたいにキヤアキヤア言ってるよこだ。

これが（書類上）あたしの夫。  
クラクラする。

「カノンどの、紹介しておきますね。副長のランドール・ミチエンです」

「初めまして、奥方様。お見知りおきを」

礼儀正しく私の手にキスをした彼は、茶褐色の髪を短く刈り込んだ青い瞳の美丈夫だった。

剛健そうっていうのかな、王子より背が高くてがっしりしてる。

うーん、この二人に見下ろされると小人になった気分だね。

……、いま、奥方様って言った？

てことはあたしと王子が（書類上）結婚してるって知ってるの？  
家に迎えに来たってことはそうか、知ってるか、そうなのね。

ってどうすんのー！  
いいの！？ バレてて！

内心あわわしながら王子を見上げると、どうかしましたか？  
なんて、まったく気にもしてない眼差しが返ってくる。

……いいのか。

あとで困るはずの当人がそれで良いならあたしは何も言わない。

「では行って参ります」

「はい、気をつけて行ってらっしゃいです」

王子の暇を乞う言葉に当たり前のように応えると、嬉しそうに微笑う。

何か喜ばせるようなこと言った？

首を傾げて見返すあたしに落とされる口づけ。

にゃっ！

部下のひとがいるのにいいッ！！

王子は気にする様子もなく、

「帰りが遅くなるようでしたら、一度連絡しますね」

と言って、今度は頬に軽くキスをして出掛けていった。

恥ずかしいやつめ……！

一部始終を見ていたメイドたちに「ラブラブですねっ」「お嬢様  
ウラヤマシイ〜」などと散々からかわれ、あたしは薬草室に避難し  
た。

まさかアレをお見送りの際毎日続けなきゃいけないのか。  
神経持つか、あたし。

ていうか、やっぱり不便じゃないのかしら。

今まで仕事場は王子の住居から近かったはずだから（だだっ広い  
けど同じ敷地内だもんね）。

城内にいらなくて良いのかな。

つらつら考えつつ摘み時のハーブを順番に収穫し、乾燥箱に入れ  
ていたとき、慌てまくったりリアが転がり駆けてくるのが見えた。

「おおおお嬢さまあっ！ タイヘンタイヘンお使いですうううっ  
っ！」

……ヘンタイお使い？

ブランシェの花と狼を象った紋章が押された封書を膝の上で遊び

つつ、あたしは重いため息をついた。

リリア曰くタイヘンお使いが持ってきたものは、なんと王宮への招待状。

差出人は、王妃様。

つまり、王子の母君。

ってことは、あたしの姑。

……逃げたい。

しかしそうする訳にもゆかず、あたしは久々にドレスアップして家の馬車で王宮に向かっているのですが。

いや、いくらなんでも杖にまたがって空からお邪魔するわけにもいかないしね？

それくらいの礼儀はわきまえておりましてよ。

実は以前一度だけ、陛下や王妃様に直接お会いしたことがある。

数年前の舞踏会で。

親父がエスコートするはずだった母様が一族関係の急用で来れなくなり、あたしが代わりに出席したのだ。

伯爵家の姫とはいえ、あたしはあたしの都合で社交界デビューもしていなかったし、もう、ホント、親父の添え物としてその場に入った。

テキトーに飲み食いして、親父が義理を果たしたらとっとと帰るはずだった。

陛下があたしに気づいて、ぜひ話してみたいなどと仰らなければ……！

その時のことはあんまり覚えてない。

あとで親父が感心したように  
「お前、すげえドデカイ猫飼ってたなあ〜」  
と言ったんで、ポカをやらかさなかつたことが判明し、安心した  
くらいだ。

もちろん、今まで緋の魔女として色々な国のそれこそ王様とだっ  
てお話ししたり交渉したり、そういうことはあった。

けどやっぱり生まれた国の方々は特別っていうか、ただのカノ  
ン・ラシエレットとしてお会いするのは心構えが違うっていうか！

そういうわけで、王妃様が女神のように美しく麗しい女性で、お  
つとりと優しい話し方をされるってくらいしか、覚えてない。

いま思うと、王子によく似てた（逆か）。

まさかあの王妃様に限って、嫁イビリとか。  
ないないない。

ってことは、やっぱりあたしが王子の嫁になった理由を説明して  
いただけるんだろうか。

でも、その場に王子や親父が居ないってのもヘン  
、  
ガタンと馬車が急停車する。

はっ、と気付いたときには放たれた拘束の呪文があたしを捕らえ  
ていて。

力づくで術を破ることもできたけれど、そうすると甚大な被害が  
周りに出ることが予想できた。

くう……！

魔女永和、一生の不覚……！

……そして状況は冒頭へ戻る。

意識の糸を伸ばせば、塔に張り巡らされた術式の直中にあることが感じられた。

魔力封じ……？

ただ対象はあたしというわけではなく、この塔に入った者全てに設定されている。

まあまあが出来かな。

取りあえず状況を確認し終え、キョトキョト部屋の中を見回していたあたしは、ここが誰かの住居になっていたらしいことを見て取った。

それなりに寝心地の良さそうなベッド、使い込んだあとがある書き机、雑多な知識を求めたらしい書物の数々。

最近まで、確かに誰かがここで生活していたらしい。

封じがされた、こんなところで一体誰が？

王宮魔導士を背後に従えた弟王子は、椅子に腰かけているあたしを眺め、ニツコリ笑った。

「兄が夢中になるはずですね。本当にお可愛らしい」

バカにされているのかと思ったら、真剣に感心されている。

……逆に嫌。

てゆうか、王子が夢中ってそれ誤解、誤解ですよー。

「申し訳ありません、強引なお招き方をして」

ううーん、王子と似てるだけに笑顔に違和感があるな。

……分かりやすく黒いんだ。

「兄に嗅ぎ付けられる前に話を済ませてしまいたいでしょうか。」

……義姉上、もう兄と契られました？」

「はっ!？」

長い思考停止による沈黙の上にあたしが上げたのは場にそぐわないすつとんきょうなもので。それで答えが分かったらしい少年がぼやく。

「その様子ではまだのようですね。…何やってんだ兄上は、一週間

もあつたつてのに」

呆れて声も出ない、と弟王子。

な、なんで初対面に近い夫の弟にそんなことを訊ねられなきゃいけないのだ……！

「時間がないつてのに悠長な……やっぱりここは俺が一肌脱いで……」

ぶつぶつと自分の世界に入り込み、意味不明な呟きを漏らす少年に眉をひそめる。

なんの“時間がない”？

「サウスリード殿下？ わたくしをこちらへ呼び出したのは一体何の所以あつてのことです？」

「俺はですね、義姉上さま。国王なんてものになりたくないんですよ」

なんの話が始まったのだ。  
わからずただ首を傾げる。

「しかし兄上が継承権を放棄した今現在、俺が皇太子つてことになつちやつてるんですよ」

うん、そんなこと言つてた。

「すつつつづけえ迷惑なんスよ！ 生まれてこの方立派な兄がいるお陰で適当に面白おかしく暮らせていたのに、いきなり次期王様だなんてそんな責任負う仕事任せられても！ 俺は裏方向きなんです

って！」

言いながら殿下はブンブン拳を上下させる。

話しているうちに、そこら辺にいるような少年みたいな口調と態度になっていく弟王子を面白く眺めた。

さっきまで策略家みたいな顔をしていたくせに、今はただのやんちゃな子だ。

王子がいつもフラットなテンションでおっとりしているだけに、兄弟でこつも差違があるのかと感心してしまう。

面白いなあ。

だけどさ。

「……ですが、少しの間のことではないのですか。わたくしとおう……イーディアス様の結婚が解消されるまでの……」

「え、もう離婚の算段してるの、早くない？ 見捨てないでよ、十代にしか見えなかった貴女に一目惚れってそりゃちよつと幼女趣味っばいけどそれに目をつぶれば兄上はお買い得だよ？」

……なんか一度にいろいろ言われて整理ができない。

えーと。

うーんと？

「え、だってあたしと王子の結婚でなんか政治上の契約みたいなもんなんじゃないの」

思わず素に戻って言ってしまった言葉に今度は弟王子が何ソレと首を傾げた。

「はい？」

はい？ つて、はい？？

「え、建前はそうだけど、兄上はこれ幸いと結婚したはずだよ？  
ずっと貴女に片想いしてたんだし」

「……はい？」

今耳慣れぬ言葉を聞いたような。

カタオモイ、て、誰が誰に。

「兄上それも言ってないの！？ 本っ気で何やってんだあの人は？」

「…余計なお世話だよサウスリード」

その声を聞いた瞬間、少年は凍りついた。

ギシリと強ばった動作で背後をゆっくりと振り返り、ヒィ、と喉の奥で悲鳴を漏らす。

「一体、全体、どういう、了見なんだ？ 私に無断で、カノンのをこんな場所に……下がれ」

最後の一言は魔女のあたしに対する牽制であつただらう魔術士たち。

最後まで一言も発することのなかつた彼らは、礼儀正しく一礼して去つていった。

おお、今の命令の仕方、王族っぽい。

そこには髪をわずかに乱して、黒の上衣はあわてて引っかけてきました、という無造作な服装で、息をきらしている旦那様が、いた。

ぱつと弟王子があたしの後ろに隠れる。と、いつても、彼の方がデカイので、全く隠れていないけど。

「いや俺だつて義姉上にお会いしたかつたんだよ！ まあちよつと騙し的なご招待になつちやつたけどさ」

静かに怒りを秘めたアメジストがご自身の弟に向けられる。

「だからと言って、何故この塔に……」

「旦那様が暮らしてた場所見たいかな、と思つてさ」

「え？」

頭上で交わされる兄弟喧嘩に傍観を決めていたあたしだけだつたけれど、耳に入ったその言葉につい口を挟んでしまった。

王子の部屋？ だつたの、ここ。

「サウスリード……！」

珍しく王子が声を荒げる。

俺悪くないもんね、という根拠のないシラを弟王子が切ったとき。

「あらあらまあまあ、お客様にお茶も出さないなんてなんて失礼な息子たちなのかしら」

更なる闖入者が現れた。

月の光を集めたような銀系の髪に、極上の紫に瞳を染めた、いつまでも美しい我が国の

お、王妃さまっ!？

っづく。

## 第七話 お嬢様の秘密（中）

「脱いで、王子」

陽の下に生きる全てのものが眠りにつく時間。

寝台に倒された王子はアメジストの瞳を瞬き、あたしを見上げた。

塔の上に月の光が静かに届く。

柔らかな淡い光に、月の女神と称された母親譲りの銀の髪が輝く。こんな状況でもなければ、キレイだと見つめるところなんだけれど。

膝の下に王子の身体を敷き、あたしは逃がすまいと瞳の力で彼を押さえつけていた。

鍛えている王子にかかれば、半分程の質量しかないあたしなんて簡単に押し退けられる。

でも、彼がそうしないことはわかっていた。

困惑して、眉をひそめる王子にあたしは唇を歪め、挑発するよう  
に笑む。

「あたしばかり薄着で不公平じゃない？ 王子はこんなに着込んで  
いるのに」

襟元、固く結ばれたタイに手を伸ばす。

その手を掴まれた。

「…後悔しますよ」

「どづかしら…?」

掴まれた逆、空いた左手で、一気にタイを引き抜く。

緩んだ彼のシャツの襟に指先を這わせて。

ひとつ、ふたつと釦を外して。

じつとこちらを見つめる王子から視線を外さず、

そこに、隠されたものを暴く

## 7・お嬢様の秘密（中）

「早くお会いしたいと思っていたのよ。イディはちっとも紹介してくれないし」

ソウがやんちゃしてくれて結果的にはわたくしラッキーでしたわね、

なんてコロコロ笑いながら楽しげに仰る、王妃さま。

あたしは余所行きの笑顔で曖昧に相づちをうった。  
先ほどの王妃さまの母親ぶりに、内心冷や汗をかきながら。

とりあえずのところの夫である王子と、その弟で誘拐犯であるサウスリード殿下に挟まれ、訳のわからない状態に置かれたあたしを救ったのは王妃さま。

その彼女は女神もかくやの微笑みを浮かべたまま、息子たちを、叱責しているとは思えない優雅な態度で追い詰めたのだ。

イーディアス、自らに与えられた責務を投げだし妻を救いに来た誠実さは良いけれど、ここはわたくしに任せ、お役目に戻りなさい。仕事をしない男は嫌われましてよ？

しかし、とか、姫が、とか言いながら私の側に寄りよとする王子を笑顔の圧力で退却させる技は見習いたいものだ。

サウスリード、貴方は本当にどうしましょう。わたくしの名を使い、伯爵令嬢でありフォート公夫人でもある女性を拉致、王宮魔術士たちを許可なく動かした罪状、あら、処刑を少なくとも三回行わなきゃなりませんわね、

まあ、刑の日取りを決めるのがタイヘンですわー。

微笑んだままの軽い口調だったけれど、目は本気で。

王妃さま、普通処刑は一回しか出来ないんじゃないですか、とツッコむ隙もない。

弟王子は必死でその状況から逃れるべく目まぐるしく思考を展開しているようだった。

が、しかし。

殿下が打開策を打ち出すより早く、王妃さまの指示により彼は衛兵に捕らえられ、

「ちょ！ オイ、お前ら不敬だぞっつ！ は・な・せえええ〜っ」

なんていう情けない声と共にフェードアウトしていった。

…現在、牢の中で皇太子としての再教育を受けているらしい。

そしてあたしは自分が思っていた当初の予定通り、王妃さまと顔を会わせているわけなんだけど。

日当たりのよい東屋で、二人きりのお茶会、あたしはどう振る舞うべきなんだろう。

さっきの騒ぎのせいで、微妙に猫が被りづらい。

お行儀よく座って、ニコニコ上機嫌の王妃さまに合わせるしかない、状況。

「ねえカノン姫、イディはちゃんと夫の役目を果たしていますかしらっ？」

や、役目？

夫の役目って何ですか、ていうかどっちかっていうとワタクシが妻の役目を果たしていないと言っかつ。

モゴモゴしているあたしを気にせず、王妃さまは美麗な眉を下げて、憂うようにお続けになる。

「あの子ったら、容姿も能力もわたくしと陛下のいいところを集め

て産んであげたのに、どうもこう、物足りない殿方に育ってしまったっていうか、型にはまっていてツマンナイ男になってしまったっていうか……異性としては刺激が足りないでしょう？」

さりげなく暴言のような気がするんですが、王妃さま。

何かフォローしなくてはと、あたしは小さく発言してみる。

「…ええと、とても、お優しいです。わたくしの、魔女としての勤めも理解して下さいますし、勿体ないくらいで……」

そうなんだよね、考えてみれば王子って偽物妻なあたしに積極的に歩み寄ってくれてるよね。

おととい私の薬草室に案内したときも、興味津々であればこれとは質問攻めだった。

こんなの王子は面白いのかしらと聞いてみると、

知らないことを知るの楽しいし、カノンどのが日頃どういうものに触れているのか知れて嬉しい、

なんて、どこまで本気なんだか、そんなこと言うし。

ところ構わず甘い言葉吐いたり軽くキスしたりするには参るけど。

ツマンナイどころか充分刺激的なんですけど、あたしにとっては。

ほんの少し前までは話したこともなかったひとなのに、四六時中一緒にいて、それが、当たり前になりかけていて。

少なくとも自分が、恋愛感情じゃないけれど、王子に好意を持っている自覚は既にある。

それがどんなものに育つかは、今はまだ分からないけれど。

「カノン姫にとっては突然のことだったでしょうから、心配していただけれど、杞憂だったようね？」

考え込むあたしに王妃さまは、フンワリ笑顔。

ああ、こういうところ、すごく似てる。

何だかこっちまで胸が暖かくなるような笑顔なの。

なんていうか、……弱いんだ。

「今日は泊まってゆかれてね、イディとソウの下の弟妹たちにも紹介したいし、陛下も執務が終わったら是非お話ししたいと仰ってましたのよ。ラシェレット伯には連絡しておきますから」

「はっ!？」

いや、ちよつと待って王妃さま!？」

本日これからの予定をウキウキと組み立て始めた王妃さまは、あたしの、遠慮します! という訴えをまるで無視、女官を呼びつけ、客間を用意するよう言付ける。

話を聞かないのは血筋か…!

そして、王妃さまの柔らかかだけど押し強い笑顔に、兄弟同様逆らえなかったあたしは、何故かそのまま、王宮に滞在することになってしまったのだった……。

「ん〜、可愛いわ〜、やっぱり〜！ 姫が緋色を着用しなければいけないのは知ってますけれど、今日は私的な訪問ですから構わないでしょう？」

キャツキヤと少女のようにはしゃぐ王妃さまに、鏡の前に立ったあたしは乾いた笑いを漏らす。

東屋から城内に移動し、連れて行かれたのは数人の女官と色とりどり様々なドレスが用意された部屋で。

常々思っているんだけど、何故あたしの周りにいる女性たちは、あたしで着せ替えをするのが好きなんだろう。

うちのメイドといい、王妃さま以下女官の方々といい……。

普段あたしが身に付けている衣服はたいていメイドたちが選んだものなのだ。

実年齢を考えると痛いだけのヒラヒラフリフリ少女趣味的なドレスばかり。

事、ファッションに関してはあたしの意思はないようなもの。

メイドたちが言うまま選ぶまま用意するままの服を着用するしかない。

そーゆーのが似合ってしまう自分がまた何とも言えず……。

でもって案の定と言うか、ここでもまたあたしは着せ替え人形になっっていた。

取っ替え引っ替え渡されるドレスを着て、脱いで、最終的に決定されたのはあまり着たことがない紫色のドレス。

肩口が広く開けられているけど、同じ布で作られたストールを首に巻き付けるからそれほど気にならない。

薄紫のタフタ、それは王子の瞳の色に似ていた。

もちろん、王妃さまのことだから、意図的に合わせたんじゃないかな。

簡単に纏めていた髪を複雑に結び直されて、薄い化粧も施され、王宮に居ても違和感のない姫君が鏡の中造り上げられていった。

来的时候にそれなりな格好をしてきたけれど、やはりプロの手はちがうな。

まじまじ、あたしじゃないあたしを鏡の中に発見して、凝視してしまう。

「ウフフ、やっぱりよろしいわねえ、年頃の娘がいるって」

側で指図していた王妃さまは着飾ったあたしに満足そうだ。

現在、王の血筋は二十三歳の王子を頭に、十九歳のサウスリード殿下、少し離れて十三歳のラウレス王子、更にその下に八歳のゲエンドリン姫、フェリクス王子の五人。

陛下は王妃さま以外の妻を持たれていないので、その全員がこの女神のような女性からお生まれになられたことになる。

絶対五人も産んだように見えない……。

ほっそりとした若々しい肢体を横目で眺め、あたしは心の中で咳いた。

お子は五人いらつしやるのに、姫君はまだ幼いグエンドリン様だ  
け、なので、さっきの王妃さまのお言葉は納得できる……、

けど、ワタクシ年頃過ぎてますが！

二十六歳ですってば！

「フフフ。イディも惚れ直すでしょう？」

仕上げのように、白薔薇の生花を髪に飾られて。

さ、お待たせでした、という王妃さまの声に振り向くと

「ぎゃっ」

じいと無言であたしを見下ろす王子がいた。

「……………」

「……………??」

お、王子？

もしもし、王子、イーディアスさま……？

もう仕事は終わったのか、王子の姿は軍服ではなくて、家で着て  
いた普段着より少しだけ畏まったものに変わっていた。

それはいい。それはいいんだけど、  
なんで固まってるの！？  
そんな凝視されると怖いんだけど！

「ほほほイディったら、なんとかおっしやいな」

バシン！

痛そうなお音がして、扇で叩かれた王子の頭が揺らぐ。

お、王妃さま、それはあんまりでは……。

王子は叩かれた後頭部を押さえながら、瞬きをしたあと、再びあ  
たしを見た。

うあ…！

輝かんばかりの笑顔にあたしの目が眩む。

「いつもの貴女も可愛らしいけれど……あまりにお美しいので、言  
葉が出てきませんでした。

素敵ですよ、カノンドの」

そう言いながらあたしの手を取って口づける。

恥ずかしい誉め言葉に気が遠くなる。

王子が本気で言っているのが分かるだけに……！

その場にいた王妃さまや女官さんたちはニヤニヤ（あたし主観）  
眺めてるし、いたたまれない、

……逃げたいっ！

しかし逃げられるわけもなく。

夕食までの時間、あたしは王子と王宮をぶらつくことになった。

と、いつてもあまり公の場は現在のあたしたちの立場上（要は、結婚を公布してないってことね）ウロウロ出来ないから、王家の方々の私的な場所を、ってことだけだ。

……ん？

逆にそれっていいの？

偽物妻に王宮の裏みせちゃっていいの？

内部情報どっかに流す気なんてないけど、ヤバくない？

あたしの心配とは裏腹に、王子は楽しそうにしている。

……そういえば。

「ねえ王子、サウスリード殿下なんだけど、」

流されてうやむやになりそうだったことを思い出し、あたしがその口を開くと、王子は沈痛の面持ちでため息をついた。

「ああ…、本当に、弟が馬鹿をしてすみません。アレに協力した魔術士たちも、それ相応の処罰を与えるように要請しますので」

「いやいやいや！ 別に実害なかったから、そんなことしなくていいですよ！ 大体、半分ワザと術を破らなかつたようなものですし」

サウスリード殿下に命じられて仕方なく従ったであろう魔術士たちを気の毒に思い、慌ててあたしは王子を止める。

そうなんですか？ 首を傾げて王子は疑問顔。

「あのね、基本的に彼らが使う術とあたしたち緋の魔女の魔力チカラって似て非なるものなんです」

あえて説明を試みると、

彼らは言霊コトダマとその法則により万物の構成に接触して、その情報を書き換え魔術と成し、

あたしたちは自分の意思を世界に伝えて、万物に変化を成す術。

「例えば…」

唇の中で数種の呪を呟き、あたしは手のひらに炎を灯す。

「今のこれは大気中の成分を言霊により空気から火の成分に書き換えました。」

これが一般の魔術。

そしてあたしたちの術は、

言いながら意思を練って、念じる。

瞬時にあたしの周りに集まった炎の輪に、王子が僅かに身を引いて瞬いた。

ちよつと勢いが良すぎた。

魔術杖がないと、微妙に調節が利かないんだよね、あたしのチカラ。

「ええと、あたしたちはこんなふうになんか念で世界に働きかけて、術を行っんです」

言いながら手を払って炎を消し去る。

そんな単純なものでもないけれど、緋の魔女に備わったチカラを一族外のひとに理論立てて説明するのは難しい。研究者じゃないし。

あたしたちと魔術士は、自分の使う術が違うものだとは本能で理解しているけれど、言葉にはしにくい感覚だから。

それを一生懸命理解しようと思えば眉間にシワを寄せている王子に気づき、申し訳なくなつた。

「だから、あたしを拘束した呪文も、消えろと念じたらよかつたんだけど、そうすると無理矢理魔術を断ち切ることになるんで、その余剰の力が彼らに返り、術者に被害が出たと思うんですね。

別に敵意は感じなかつたから、様子を見ようとそのまま囚われたんですよ。

まさか弟君が関係してるとは思いませんでしたけど」

あの魔術士たちに少しでもあたしを害しようとする気配があればヤバかつた、というのは黙っておこう。

その意思があればあたしは迷うことなく彼らを排除していただろうから。

あたしたちは寿命と世界を守る以外の要因で生を終えることを許されていないのだ。

さつきは試すくらいに思惑しか感じられなかったし、緋の魔女が魔術士にケンカを売られることはわりとあること。

彼らが身を削るように学んで習得する魔術を、魔女に生まれたあたしたちは息をするように使うことができるから。

そもそも成り方も立ち位置も違うと言つのに、どうしても競うことが止められないらしい。

あたし個人は、単純に、自分の努力と鍛練を重ねて魔術士になったひとたちをスゴいなあ、と思うんだけどね。

そりゃあたしだって、勉強はしてますよ、魔術の構成が解らなきや対抗することも出来ないし。

だけど一族の血を持つことで、だいぶ楽をしているのは嘘じゃないからさ。

じゃなくて。

何故か魔術講義になりかけた会話をもとへ戻す。

「あの場所は何なんです？ 王子の住居だと弟君は仰っていますが」

まだ魔術と術の違いに頭を悩ませていたのか、王子はハツとして一瞬言葉に詰まる様子を見せた。

「あ ああ、ええ、そうですね……、カノンどのと結婚するまでは、あの場所で寝起きをしていました」

王子なのにえらく質素な調度品ばかりだったよなあ、なんて思いつつ、一番気になっていることを聞く。

「あの魔力封じは？」

「……そのままの意味ですよ。皇太子という身分上、害意を持たれることもありましたから。この身に魔術が届かないようにしていただきます」

「ふーん。いろいろ面倒くさいんですね」

あたしが気がないように受け流すと、僅かに安堵の気配。

王子にしては言い訳が上手くなかったわね。

そんなことで魔女が騙されると思っているの？

あの塔に施された魔術は塔の中を無魔力に保つものだった。

結果的に外からの攻撃があつたとしても、届いた瞬間打ち消されるから、防ぐことにもなる。

だから王子の言ってることは間違いじゃない　けれど、それならもっと効率のよい方法があるはずなのだ。

サウスリード殿下の言っていたこと。

あたしの後ろに隠れたときに小さく落とされたささやき。

兄の隠しているものが知りたければ、その胸を見てください

“隠しているもの”

それはあたしと王子が詐欺みたいな結婚をしなければいけなかった理由でもある。

微笑みながら、あたしの手を取り歩く彼を見上げた。

何を、隠しているの？

「それでは、何かございましたらご遠慮なくお呼びくださいませ」

一礼して女官が去っていくのをあたしは寝台に入りながら見ていた。

公の場とは違う気さくな態度で息子の嫁（あたしのことだ…！）を迎えられた陛下との緊張の会話を王子に助けられながら、

下のご兄弟たちの質問攻めに遭いつつ（サウスリード殿下はお仕置き中なので不在）、

意外すぎる王家の方々とのアットホームな夕食を過ごしたあと。

疲れているだろうからと早々に就寝の用意を整えられ、あたしは客間に案内された。

やっぱりといえばやっぱり、あたしたちの結婚の事情には全く触れられず、ただ王子の妻として扱われた。

王宮の奥では王子の結婚は隠されていない。

女官たちの態度でもそれがわかった。

それがどんなにおかしいことか、世間知らずのあたしにだって分かる。

国の政務に関わることなら、最初に思った通りあたしは知らないふりをするべきなんだろう。

だけど。

それが全く別の理由からくるものだとしたら？

あたしは寝台から降り、窓辺へ歩み寄った。  
ガウンを羽織ってベランダへ出る。

ここからは見えないけれど、方角はわかる。

杖を呼び出し、軽くまたがり。

そして、彼がいるはずの場所に向かって空へ舞い上がった。

「カノンドの!？」

明かりのついた窓を叩くと、やはりと言うか、王子がそこにいた。  
昼間あたしが連れてこられた魔力封じの塔。  
その最上階、寝室に当たるであろう部屋に。

慌てて開けられた窓枠に足をかけ、ヨイショと中へ滑り込む。  
杖を消してしまつと、とんでもないところからのあたしの登場に

固まっていた王子が呟いた。

「カノンどの…魔術…？」

この塔の中で何故魔術が使えるのかと言いたいらしい。  
魔力を封じられるはずなのに。

内的空間に魔術杖を収めるのは、厳密に言うと魔術じゃないんだ  
けど。

「この塔に施された術式ではあたしの魔力は封じられませんか。  
ていうか、緋の魔女のチカラを封じるとは、世界が滅びない限  
り無理です」

あるいは、自分の魔力が枯渇する以外は。

はあ、とまだボンヤリしている王子を、これ幸いとあたしは蹴倒  
した。

「!?!」

突然の暴拳に対応しきれず、王子はそのまま狙ったように寝台に  
倒れ込む。

その上に、座るように乗っかって。

「カノンどの…!?!」

驚いて瞬きを繰り返す王子を、あたしは強い眼差しで見下ろした。

突然現れて、夫だなんて言って、あたしと一緒にいるのが嬉しい、

みたいな顔をするくせに。

肝心なことはどうして言ってくれないの。

何を隠してるのよ。

あたしに踏み込むくせに、貴方には踏み込ませてくれない、不公平じゃないの。

時間がないってなに。

貴方の隠していることはなに。

あたしが要<sup>かなめ</sup>なはずなのに、あたしだけが何も知らない。

教えてくれない。

だったらいいわ、

「脱いで、王子」

強引にだって、暴いてやる。

つづく。

## 第八話 お嬢様の秘密（後）（前書き）

リアルタイムでお読み頂いていた方々、お久しぶりでございます…。

そろそろ新婚らしい場面が増えそうなので、改めて15禁設定にしました。

いろいろ謎が解明されつつ、まだ伏線を張り巡らせ引っ張っております。

カノンちゃん頑張るの巻。

## 第八話 お嬢様の秘密（後）

「んっ…！」

噛み付くみたいに唇を奪われる。

逃れようと首を振っても、あたしの小さな体格では王子に敵わない。

息を奪われ、舌を絡め取られ、痛いくらいに吸う、そんな口づけを受けるのは初めてだった。

「お、うじ…っ」

「…後悔すると言ったでしょう…」

抗う最中に乱れて襟元が開いた胸に、熱い唇が押し当てられた。

這う水音。

ぞくりと肌が泡立った。

どうして気付かなかったんだろう。

少し意識を研ぎ澄ませば、わずかに感じられるその禍々しい気配に。

王血の守護さえも敵わず、王子の真名に絡み付いた、それに。

押し倒した王子の白いシャツの胸元から染み出るような黒い気に、あたしは眉をひそめた。

これは母様　長しか知らないことだけれど、あたしにはその人の魂の色が見える。

さらに言つなら、その魂に刻まれた真名すらも、読みとることが出来るのだ。

自分の他にそんなチカラを持つひとは知らないから、あたしの見えているものが正しいのか、どう表現したらいいのかも分からないけれど、人には各々の色というか　輝きがあつて、あたしには光としてそれが見える。

その人の周りを彩る、魂の真実が。

もちろん普段はそんなものは見ないようにしてる。

いちいち見てたら疲れるし、プライバシーの侵害に当たるものね？

だから、王子に真視を使ったのもこれが初めて。

もっと早く、使っていれば分かったのに。

気高い紫色を内に包んだ白金、王子の魂気はそんな輝き。  
それが王族という立場から来るものか、それとも生まれ持ったも  
のか判断はつかないけれど、普通の人の数倍は眩しい、強い光だ。  
なのに。

それが汚染されたように、ところどころ闇色に巣食われている。

そして真名に絡み付く毒々しい魔気。  
あたしの予想が正しければ、これは。

隠しているものが知りたければ、その胸を

あたしは耳に残るサウスリード様の囁きに従って、王子のシャツ  
を剥いだ。

一瞬抵抗を見せようとした王子だったが、諦めたのか、少し  
苦しげに瞳を揺らしただけで、ため息をついて顔を背けた。

予想していたとはいえ、眼前に現れたその印にあたしは息を飲む。

魔印。

王子の心臓の上、その白い肌に、楔形の黒い痣が浮き出していた。

「つきや…!？」

あたしがその印に気を取られたその隙を逃さず、王子が身体を返すように起き上がった。

当然、王子の上に座っていたあたしは転がり落ちるところを彼の腕に捕らえられ、さつきとは逆に、自身が下になる形で寝台に倒れ込んだ。

あつという間に両腕を纏めて頭の上で束ねられ、脚は王子の膝に押さえられる。

その手早い体勢逆転にばちばちと瞬くあたしに向けられる、冴えたアメジスト。

何の感情も見えないが故に、彼の怒りを感じた。

そりやまあそうよね、隠してたこと無理矢理曝したんだもの。

しかもあたしみたいな小娘に（いや年上だけど）押し倒されちゃったし。

向けられた視線が居心地悪く、身じろいだ瞬間、ギョツと掴まれた腕に痛みが走り、あたしはハタと己の姿を思い出す。

上質な寝間着はピラピラと薄く、ガウンがなければモロ身体の線が見え　ってガウンはだけてるしいい！

寝間着で密着するのは初めてではないけれど、何となくあの時とは全く状況の違う今、あたしは表には出さず焦りまくる。

ええと、ええと。

……ヤバイ？

「……貴女に余計な入れ知恵をしたのはサウスリードですか？」

調子だけは優しく、だけど聞いたこともない低く冷静な王子の声があたしの耳に落とされる。

乱れた銀髪から覗く据わった目を見上げて、ドクドク鳴る心臓を意識しながらあたしは唾を飲み込んだ。

怖いー！

冷やかに怒る王子、怖いー！

なんで笑顔になの、ってというか目が笑ってないよ！

危ない体勢も相まって、あたしは内心ビクビクしながらなるべく王子を刺激しないように、小さく頷いた。

「あの、その、か、隠していることが知りたかったら、胸を見ろって、王子、その印は……」

肌とその刻印の境目に爛れたような痕を残して胸の楔から広がる黒い痣。

それは魔の者が獲物と見定めた者に付ける所有印。

その目的により印の効果は違うけれど、王子に刻まれた印は、あたしの見立て違いでなければ、ゆっくりと彼を損なわせ、やがて命を奪うもの

心臓の位置から両胸にまるで黒い翼が広がるような紋様を描く痣の具合からして、かなり前に受けたものだと分かる。

そう、あとわずかで墮ちるほどの……、

しかし。  
王子の真名に絡み付き、魂を侵食しようとしているそれは、今動きを留めていた。

彼の定めに新しく結ばれた縁に。

その特殊な縁の持ち主との契約により、魔印の呪いは凍結している。

<永和>という、世界にその存在を刻まれた者の名の力が、魔の力を中和していた。

「ああ、だから……」

全てに納得がいった。

カノン・ラシェレットが王子の花嫁になったのではなく、王子が永和＝カノン・ラシェレットの婿になった理由が、これであった。

きっと、王子のこの呪いを知ったうちの父が、手段のひとつとして力ある魔女の庇護下に彼を置くことを提案したに違いない。

緋の魔女という、世界の巫子である存在なら、魔者の力にだって対抗できる。

現にこうして、“婚姻関係を結んだ”という言葉だけの事実だけでもその呪いは止められているんだから。

ブランシェリウムの貴族としての籍を持ちつつ、緋の魔女という

存在であるあたしがいてこそその対抗手段だけれど。

だけど何故？

最初からそういう事情があると分かっていたら、もう少し巧く呪いを留められたのに。

あたしたちのあやふやな婚姻による絆は、今にも途切れそうに細い。

婚姻による呪いの凍結は、あくまでも応急の策だ。

いつ、呪いと守護との均衡が傾くかわからないほどの危うい処置。あたしと実際に契りを結んだとしても、それは守護が強力になるだけで呪いが消せるわけではない。

魔族の呪いは、掛けた本人より強い力を持つ者が解くか、呪われた者が呪いをかけた相手を殺すかという方法でしか、なくならないのだから。

確かに、この事実を知っていたとしても、表立ってあたしがその呪いを解くことは、一族の掟に従うならばしてはいけないことだけども、何事にも裏道ってものがある。

協力くらいはできるのに。

なにも騙すようなことをしなくても、  
そこまで考えて、あたしは初めて気付いた。

事情を話してもらえず、騙し討ちに婚姻関係を結ばれたことに、あたしの存在を利用されたことに、  
自分が傷付いているってことを。

どうして？

最初から茶番だって、理由があつてのことだって、分かつてたはずでしょう？

今さら傷付く理由なんて ……

「……違います」

あたしの揺れた瞳の翳りを読んだのか、思考を王子の声が断ち切る。

「利用したのは呪いの方です。」

……私が貴女を手に入れるために」

王子の手があたしの頬を包む。  
唇が塞がれた。

「っふ…んんっ」

いつもの甘いだけのキスじゃない。  
奪つようなそれに、意識すら持っていかれそうになる。

「…そんな姿で、散々人を煽って、私のことを試しているんですか」  
くちづけの合間に囁かれる言葉は熱を秘めて、あたしに目眩を起  
こさせた。」

「呪いなんてどうでもいい。」

私は貴女の傍に行きたかったただけだと、そう告げたら、どうします」

「や……！」

肌を舐められ、首筋を強く食まれる。

与えられる愛撫に、混乱してうまく頭が回らない。

王子の言葉がグルグルと胸の中で明滅するのに、意味すら掴めずあたしはもがいた。

「待つ…、王、子…っんや！」

大きな手のひらに、あたしの恥ずかしいくらいささやかな膨らみが包まれる。

うそ、うそうそ、

待って、待ってよ、

まだしないって言ったくせにー！

頭の中まで真っ赤になりそうなくらい、逆上しているのが自分でも分かった。

ザラリと剣ダコのある指が素肌を滑り、あたしは身を震わせる。

嫌悪じゃなく。

感じて。

「誤解されなくなかったから、ずっと堪えていたのに、貴女ときたよ…」

「っあ、あう…」

甘いような弱い声を上げているのが自分だということが信じられない。

王子の吐き出す熱い息と唇に翻弄されて、身を振る。

無理矢理されようとしているのに、抵抗しない自分が、王子から伝わる熱を心地好いと感じる自分が、いた。

それは。

その理由は。

額を合わせて、煌めく紫の瞳が嘘のないことを伝えるように、真っ直ぐにあたしを囚える。

「…呪いを緩和させるために貴女と結婚したと、皆が思っているでしょう…：：：真実を知るのは、私の想いを知るものだけ」

ずっと。

と、王子が呟く。

「あの中から、ずっと、貴女を 愛していた」

その告白に鳥肌が立つような高揚を覚えた。

“あの時”がいつのことなのか知らない。

或いは、サウスリード様が溢した言葉に関係したことももしれな

い。

そんなことは、今どうでもよくて。

で、肝心なことは、あたしが、王子の告白を嬉しいと感じていること

そう。

嬉しいのだ。

あたしは、彼の告白を嬉しいと、思っている。

いつの間にだろう。

出逢ったのはほんの数日前。

それまで、全く自分の人生には関係のないひとだったのに。

ただ少し、わずかな時間を共有することになったひとだと、思っていたはずなのに。

う　いつの間に、あたしは彼を、この内に住まわせてしまったんだろ  
う　……。

「……王子、」

くちづけに応えながらあたしは、名残惜しげに離れる舌先に彼の  
名前を乗せた。

イーディアス。

魔力を込めて呼んだそれに、彼は逆らえなかった。

金縛りにあったように動きを止めた王子の下から抜け出し、チカラを使ってもう一度彼を押し倒す。

「…カノンの、」

真名を支配されて、まだ痺れたように身体を動かせない王子は、困惑の眼差しをあたしに向ける。

殆ど釦が外れた状態になっている彼のシャツを、痣が全て見えるように剥いだ。

綺麗に鍛えられた胸に浮かぶ黒い忌々しい紋様を指先でなぞる。

< ヴァ・ン・セ・リ・ア・ー・ル >

あたしの敵の名を。

逃さないよう、記憶に叩き込んで。

「 今まで知らなかったけど、」

戸惑う彼の視線を受け止めようにあたしは自然と微笑んだ。

「 あたし、独占欲強いみたい」

髪を留めていたピンを外す。

「自分のモノに、誰かの印が付いているのは業腹だわ」

その尖った針先を手のひらに突き立て、皮膚を掻き切った。

あたしの手のひらから流れ出る赤。

驚きに見開く王子の、鼓動を刻む命の源、その真上に滴を落とすとした。

「ッア……！」

熱いものに突然触れたみたいに　　実際、彼には炎を直接押し当てられたように感じるんだろう　　跳ねた王子の身体を、意思の力で押さえつける。

構わず、集中。

王子の魂に書き込まれている予定された道筋を、強引に、あたしの運命に重ね繋ぎ合わせる。

「……ッ、」

あたし of 意思に合わせて彼の肌に着いた血球が滑るように動き、赤い筋を引きながら紋様を描いていく。

その赤は黒く浮かび上がった楔に絡み付き、絡め取り、まるで鎖に巻き付く蔦のようにその姿を覆った。

上書きを始めた時から逆らうように蠢く黒い呪力を意思の力で押し伏せ、あたしは手のひらの傷を自らの爪で開いて更に血液を溢す。

痛いなんて思う余裕もない。

それに、あたしより王子の方がずっと苦しいはず。呪いを書き込まれ、更にその上からあたしの術を重ねている、その負担は計り知れない。

王子に呪いを掛けた魔族がどんな奴かは知らないけれど、かなり高位の存在だ。

直接相對している訳でもないのに、何なの、あたしのチカラを弾こうとするなんて！

ムカつくのよ！

八つ当たり気味の怒りをチカラに変換して、更に意思を強く、その呪いの軸に注ぎこんだ。

ジリジリと肌を焼く刺激に時折眉をしかめながら、王子は最初に声を上げたきり、一度も抗う様子を見せない。

ただ、血を流すあたしの手のひらを見つめて、苦し気にしているだけ。

あたしがしていることを理解している訳でもないだろう、だけど全て預けてくれる、その態度が嬉しい。

信頼、してもらっているんだろうか。

その思いがあたしの力を後押しする。

黒い痣の最後の一端にくるりと赤い線が巻き付き 完全に、呪力を押さえ込んだ事を確認したあと、あたしは息を吐いて術を切った。

途端、気が抜けてグラリと傾いだ身体を下から抱き止められる。

傷付いたほうの手を掴まれ、強く手首を圧迫された。

「無茶を…！」

憤った眩きを漏らしながら、王子があたしの手に布を巻き付ける。

「うー、だってねー、血はチカラって言ってねー、」

「魔術談義はあとでいいです」

叱るような口調で言葉を遮り、お姫様抱っこであたしを抱き上げる。

貧血と、術の反動でグッタリしたあたしは素直に王子に身体を預けた。

頬に触れた彼の裸の胸を見ると、黒い翼は飛び立つのを阻むように緋色の鳶に覆われている。

満足して笑う。

「これも一時しのぎだけねど。」

あたしの血潮が流れを止めない限り、あたしの命がある限り呪いなんかは王子を奪わせない。

「……王子。後で、ちゃんと、教えてね」

どっと眠気が押し寄せ、閉じようとする瞼に逆らいつつ、あたしを何処かへ運ぼうとしている王子に眩く。

なぜ呪いを受けたのか。

そんなことは後回しでいいから、

あたしをいつから知ってたのか、

あの時ってどういうことか、

ずっと想っていたというのには本当なのか、

あたしが知らない貴方のこと。

もっとたくさん、知る権利が、あたしにはあるでしょっ？

あたし、貴方の奥さんなんだから。

っく。

第九話 お婿様、絶好調。(前書き)

またしてもお待たせしました…っ！ これからもこんなペースですが、よろしくお楽しみくださいませ……。

第九話 お婿様、絶好調。

「カノンどの、はい。」

今日も朝からキラキラと麗しい笑顔を振り撒く旦那様は、うやうやしくあたしの口元までスプーンを差し出した。

今朝何回目かの逡巡のあと、あー、と開けたあたしの唇に程よく冷まされたスープが流し込まれる。

ぱくりむぐむぐごきゅん。

さすが王宮の料理人、何てまろやかで野菜のそのままの風味を生かした素晴らしいスープなのかしら！

……なんて味を楽しむ神経は今のあたしにはない。

旦那様自ら小さく千切って下さったパンの欠片をまたしても、はい、あー、ぱくり、むぐむぐ、ごきゅん、を繰り返して腹の中に納める。

……うつつうつつ！

幼児じゃないのよあたしはあぁっ！！！！

怒鳴りたくても怒鳴れない。

何故ならば、自業自得故に。

ジトリと恨みがましくあたしは自分の手を見下ろした。

白い三角の布で吊られた、包帯ぐるぐる巻きの、自分の右手を。

なんで後先考えず手を切り開いちゃったのよ昨夜のあたし……  
！！！！

自由に手を動かせない妻のために、甲斐甲斐しく朝食の介添えをする王子を、またしても今朝何回目かになるため息を吐きながら、あたしは眺めたのだった……。

## 9 . お婿様、絶好調。

……一応ね、あたしだって固辞したのよ。

ちっちゃい子じゃあるまいし、ましてや王子に食事の介添えをしてもらうなんて、そんなこと。

しかも、プライベートエリアと言えど、王宮の庭ですよここ！  
屋内にいるより外で過ごす方が、あたしたち魔女には世界を巡るチカラを受けやすいということは、確かにあたしが王子にお教えしたんですけども！

今もこうしつつ、体内に万物の気を取り入れてチカラを蓄えていますけども！  
その方が治りも早いんですけど！

衆人環視（衛兵さんとか侍女の方々ね）の中、はい・あ〜んを繰り返さなければいけないって何の羞恥プレイつつ？

左手は動くんだからこっちで手掴みするよ！

……ええまあ、ミルクの入ったコップ倒しかけました。

フォークでトマト刺そうとして皿の外に逃がしました。

ほづら、やっぱり不便じゃないですか、なんて、してやったりな笑顔を浮かべた王子に負けたのはあだしだけど！

てゆーかね、動かせないくらいこんな包帯ぐるぐる巻きにするほどの怪我じゃないと思うの。

ヘアピンの針で手のひらをザツクリ切った傷と、呪いを下準備もなく力業で封印し、未熟にも体内魔力のバランスを崩して昏倒寸前になったあたしを、王子が心配するのもわからないでもないんだけど。

一晩ゆっくり寝て、もう大丈夫になったんだってば！

だから、過保護はやめてお仕事に行ってくーだーさーいー！

キリキリと念を送るあたしに気づいているのかいないのか、王子は笑顔で受け流す。

あたしを見つめるその瞳はひたすら甘い。

なんかパワーアップしてませんか王子。

こつ、王子様フェロモンただ漏れな感じなんですが。

笑顔がキラキラ過ぎて眩しいんですけど！

爽やかな風がそよ緑揺れる庭園で、あたしは何故か貞操の危機をビシバシ感じていた。

だつてさ、なんかさ、王子の瞳が。

……あのとときと同じ熱を、秘めてるように思えて。

それを思い出した途端、ドレスのデザインと髪型にうまく隠され

ている、肌に散った薄紅色の花びらが熱くなったような錯覚に、内心慌てる。

起床して、手が動かせないあたしのために侍女の方々が何処からか用意された（昨日着せ替えされたのともまた違う）ドレスを着付けて下さったんだけれども。

見ないフリしてた、胸元に残された王子の付けたアト、を、発見され、意味深に微笑まれたりして……あたしがどんなに恥ずかしかったかー！

……あのときの、あたしを組伏せ見下ろした男の目をしてる気がするなんて、気のせいよねー？

いやいや、まさかこんな場所で、ねー？

……お願いだから、今にも押し倒しそうな目で見るのはやめてえええ　っ！！

誰か助けてくれ！　と祈るあたしの願いがどの神に伝わったのかは知らないけれど、とりあえず、それは有能官僚の仮面を被ったちやらんぼらん親父の姿をしてやって来た。

近衛兵に先導されて現れた親父は文官のタイをきっちり締めて、王子に礼を取る。

「お寛ぎのところを申し訳ありません、殿下。妃殿下のお時間を 잠시頂きたく」

うおう、親父がマトモに見える、気持ち悪。

他人の目があるため、平然としつつも怖気をふるっている、親

父の申し出に鷹揚に頷いた王子は、傍に居た侍女らに合図をして東屋を片付けさせ、自ら席を外された。

「少し執務をして参ります。用のあるときは侍女に命じて、くれぐれもご自分で動こうとはなさらないように」

いや王子、デコチューは余計だと思つたよ。

そして残されたあたしと親父。

……ん？

アレ、妃殿下ってあたしのことかツツ!?

ここは王宮、となれば外では伯爵令嬢とその婿なあたしと王子の立場は逆転し、王子と王子妃になる。実父でも、あたしを王族扱いしなければならぬ面倒な事情。

王子は我が家の籍に入ってるはずなのに、その辺、融通が利かないっていつか。

「妃殿下、お怪我をなされたとのこと、具合はいかがですか」

態度はあくまで丁重に、しかしあたしの護衛にと配置された衛兵と侍女には見えない角度で悪戯っぽく笑む金緑の瞳。

このくそ親父。

「ご心配には及びません。大事をとって、このようにしておりますが、数日あれば治りますわ」

座ってもよいですよ、と身ぶりで示すついでに辺りの風の流れを

いじって会話が聴こえないようにする。

その気配を感じた途端に親父は仮面を外した。

ニヤリ。

「首尾よくやった?」

「やってねーよ!」

呪いを封じた話を聞いて、たぶん契りを結んだのかと思ったんだろうけど、仮にも父親が妙齡の娘に聞くことかッ!

ち、孫はまだまだか、と舌打ちする赤い頭に蹴りを入れなくなつた。

「ちょっとそれより王子のあの呪いどーゆーコト! なんで最初に言っとかないのよ、あと数日気付かなかつたらヤバイとこよ!」?

八つ当たりぎみに問い詰める。

しかし親父はヘツと鼻であたしの勢いを削ぐように笑い、爆弾を落としてくれる。

「アイラちゃんは一目で見抜いたぜ? 修行が足りねえな、< 永和

>?」

.....ツキいー!!

なんで母様まで言ってくんないのよー!?

思いつつも、母様の 長の幻が、厳しく醒めた瞳で告げる言葉が聞こえる。

『平時と言えど、感覚を鈍らせるな。常に思識<sup>シンキ</sup>の網を張り巡らせて

おけ』

はいはいはい、あたしが悪うございました！

確かに怠っております！

ちつくしよー、魔女永和、またしても一生の不覚よ！

でもだからってどうなの、あれ以上呪いが広がってたら王子、墮ちてたところよ？ それでも放置しておくつもりだったのかしら。

そんなあたしの心の声が聞こえたわけでもないだろうけど、親父が静かに話し出す。

「……国から緋の一族に助力を求めるときも出来たんだがな。それは殿下が拒否した。世界の危機でもあるまいに、自分個人のことにも国も一族も巻き込むつもりはないとな」

あたしはキュツと眉根を寄せた。

……それは、人間としては立派なことかもしれない。

だけど、一国の未来を背負う皇太子としてどうなのか。

国を思うなら尚更、どんな手を使っても自身を魔の手に墮とすことは避けるべきなのに。

王子らしくない。

「……殿下がまだ、緋の一族をさほどご存じでなければ頷かれたんだらうがなあ？」

どういう意味よ？

怪訝に親父を見返すあたしを揶揄するように眺め、ヒラリと手を

振って乱暴に話をまとめた。

「で、サウスリード殿下の情報もあって俺が最終手段をとったわけだ。 どうせ棄てるつもりなら降下してうちの姫の婿になりませんかーってな」

サウスリード殿下の情報？

そう言えば、何かいろいろ変なこと仰ってたわね。

王子の呪いが分かったのも、彼が示唆したからだし……。

「…ねえ親父、王子って以前あたしと会ったことあるの？」

クク、と含み笑いで答えるだけで、親父は結局その辺りのことははぐらかした。

王子に直接訊け、だなんて可笑しそうに言って。

「とりあえず俺は優秀かつカワイイ孫が出来りゃあ何にも言うつことはないんでな。」

成り上がりの伯爵に王族の血も入って、さんざん養父母やアイラちゃんを馬鹿にしてくれた奴らを見返せて万々歳だし。

あとはカノンちゃんがうちの婿殿を逃がさないようにガッチリ捕まえとけるか、そこだけが問題」

失礼な。

だけど軽い言葉に隠された全権委任状をあたしはしっかり受け取った。

あとは、

「ついでに“長どの”から伝言。自分のオトコは自分で守りな、だつてよ」

パチリと瞬いた。

長がそう言うつてことは、良いのか。

全力で戦つても。

「……争いを収めるはずの緋の一族が実は好戦的つて、誰も思わな  
いだろうなあ……」

いつか聞いた母様と出会った頃のアレコレを思い出しているのか、  
遠い目をして呟く親父にあたしは微笑んだ。

「うふふ、お父様、心配無用ですわ。わたくし、絶対に浮気なんて  
許しませんから」

「そうか……魔術省に国の結界強化しとけつて言つとかないとな  
ー……」

「ついでにいくつか王宮の結界も綻んでいるの、指摘しておいてく  
ださいな」

「え、マジで？ どこ？」

「王宮魔術士を気取るなら自分で見つけてみな、と御伝言くださる  
？」

「……不意打ちで拉致られたの根に持つてるだろ、お前」

そんな生温い父娘の会話は、王子が戻ってくるまで続けられたのだった。

「お姉さま、お空飛べるって本当？」

「まほう、見せてー」

性別違いのよく似た顔を期待に輝かせて見上げる子供たちにあたしはたじろぐ。

昼食を済ませたあと、さすがに長々と仕事をサボるわけには行かなくなつた王子が側近にさらわれていったあと、王宮を辞しようとしたあたしは下の殿下たちに捕まってしまった。

子供たちの遊び場になっている日当たりのよいサロンに手を引かれて連れていかれて。

そしておねだりが始まったのです。

うーん、なつかれるのは嬉しいし良いんだけど、どうしたものか。王子の呪いを封じるのに、昨夜はチカラを使ったけれど、あれは塔の結界内だったし、事情が事情だから言い逃れできるだろう。

しかし。

王宮は王宮魔術士の領域。

部外者であるあたしがある中であからさまなチカラを振るうのつて、ちよつとマズイ。

でも、この期待に満ちた子供たちの瞳に抗うのもツライ。

グエンドリン姫とフェリクス王子に纏わりつかれて困っていたあたしを助けてくれたのは、サロンの窓辺で静かに書物をお読みになられていたラウレス殿下だった。

「二人とも。義姉上はお怪我をなさっている、無理を申しとはいけない。それに魔術なら魔術士たちについても見せてもらえるだろう」

十三才にしては落ち着いた冷静な声が弟妹たちに向けられるのを聞いて、あたしはこっそり驚いた。

そのときのあたしの心境を表すなら、

わー、しゃべったー。

……こんな感じ。

だって、昨日の晩餐のときも、ラウレス殿下だけひとつことも話してくれなかったから、あたし、嫌われてるんだと思ってたのよ。変な魔女が自慢の兄上に取り入りやがって、とか思われてるんだろっなーって。

だから、声が聞けてかつ庇うような発言をしてもらえたのが嬉しい。

感謝を込めてニコリと微笑むとふいと目を逸らされた。

……照れ屋さんなのかしら。

「だって兄上、まじゅつとまほうは違うんだよー」

膨れて仰る末王子に、あらよくご存じねー、と頭を撫でそうになった。しなかつたけれども。

「現実に見て、魔術と魔法の違いが解るようになってからお願ひする。グエン、お前も、空を飛びたいなどと言って困らせるんじゃない。知れて責を負うのは義姉上なんだからな」

正論です、とっても正論です。

しかしお子たちがそれに素直に従うわけもなく。

「じゃあおケガが治って、お父さまが“うん”と仰ったらよいでしょう？　ね、お姉さま」

「ぼくもおねがいするっ」

あはー、拒否権ないみたいー。

トホホな気分ですら思った。

「けってーい！　とはしゃぐ弟妹を呆れたように見やって、父上よりイディ兄上が問題だろう、と呟かれたのは聞かなかったことにする。」

「やほー、義姉上。チビたちのお守りしてくれて有難う、でもあんまりなつかせると兄上がヤキモチ妬くよ？」

どことなくやつれたサウスリード殿下が、そんな軽口を叩きながら部屋へ入ってきた。背後に、黄と銀の帯を身につけた人物を連れて。

敷物の上に座って、姫君たちに絵本を読んで差し上げていたあたしは慌てて立ち上がる。

この国で、魔術士のローブに黄と銀の帯を着けた方と言ったら、決まってる。

「魔術士長どの」

片手を吊っているため、軽く膝を折る簡易礼しか取れないのが申し訳ない。

魔術士長どののはうちの鬼母、もとい長も敬意を表されるかたなのだ。

こうして間近にお会いするのは初めて。

ダンディーー！ ご年配の方なのになんて覇気があって澄んだ魔力をお持ちなの、お素敵ー！

ああん杖を出して最敬礼でお迎えたかったー！

「いやいや妃殿下、こちらが礼を取らねばならぬ身、畏まられることはない。

殿下方、義姉様をお借りして宜しいですかな？」

しばしブーイングをかまされたお子たちだったが、ちよーが言うなら仕方ない、ちゃんと返してねー、と、譲り渡される。

あたしオモチャ？ オモチャ扱いですか？

少し心配そうなラウレス殿下に見送られ、あたしはサロンを後にした。

そうして案内されたのは、

え、ええー、あたしがここ入っていいんですかー、な、魔術省庁の奥も奥、長どこの執務室だった。

い、居心地悪。

気負いも何もないサウスリード殿下と、ニコニコと好意を向けてくださる長どのがいるから、探るような、まわりの術士さんたちの視線にも辛うじて耐えられる、けれども。

「ラシエレット卿から助言を頂きましたな。なんでも、王宮の結界に綻びを感じられたとか」

ひい。親父め、余計なこと言っていないでしょうね。下っぱ連中はどう思われようが構わないけど、長どのにやな娘だって思われたらショックだしー。

見当違いにドキドキしているあたしには気付かず、長どのは側近の方が差し出した紙を卓上に広げた。

王宮の、簡易地図。

「改めて調べてみましたら確かに数ヶ所緩んでいる場所がありました。我々が確認し、直した箇所と相違ないか、妃殿下：いや、魔女どのに確かめていただけないかと」

魔女どの、と呼ばれた瞬間背筋が伸びる。

意識が切り替わるのが自分でもわかった。

カノン・ラシエレットから魔女永和に。

ザッと印のつけられた場所と、意識を拡げて感覚に触れる術式を

読んで合わせていく。

親父伝てでイヤミ言ったのはほんの数刻前なのに、仕事早いな。しかも、いい印象はない魔女の意見を採り入れて、すぐ実行するなんてこの長どのじゃなかったらこうはならないだろう。

だからあたしも敬意を示して、掟に触れない程度に助言する。

「このこと……ここ、見落とされていますよ。あと、直されたこちらは良いんですが、引きずられて反対側の術式が歪んでるようです。地下に気道が通っているため、この二カ所は同じ核を使われた方が良いかと。相乗して、術も強化できますから」

部外者でもあるあたしに魔術省の手抜きを指摘されるも同然なことに、苦々しげな視線が投げ掛けられる。

長どのと、あたしが視るかぎりバランスのよい魔力を巡らせている数人だけが納得したように頷いた。

魔術士としての良し悪しがわかるこの反応。

どうもあたしに反感を抱くのは、若い術士に片寄っているようだ。

なんたるな、アレかな、やっぱり外見小娘なせいかな。

侮られているんだろうな。

ある程度お年を召していらっしやる方々は、たぶん、二十数年前にあつた戦を経験されているからだろう、緋の魔女がどういふ存在かご存知なのだ。

だから割合、すんなりあたしの言うことを受け入れられている。

こればかりは仕方ない。

今さら年齢に見合った外見になれるわけでもないし、なれるものならこっちがなりたい。

いつものように、異分子を見る目は意識の外に受け流した。

「ジーさん、そろそろ」

「そうですね、イーディアス殿下に本気で怒られると寿命が縮まりますからな。 永和どの、有難うございました。 また何かあれば、ご助言いただきたく」

「わたくしでお役に立てることが御座いましたら、いつでも」

サウスリード殿下のジーさん発言にオイコラと内心ツツコミを入れつつ、ニコリと微笑んで礼をした。

一拍遅れて、寿命が縮まる怒れる殿下って？ と疑問が浮かび上がったけれど、 扉の外に出て、その言葉の意味を理解する。

ええええ、確かに！

長どの、寿命が縮まります！

黒の軍服姿の夫が、そこに数人の供を従えてあたしたちを待ち構えていた。

「サウスリード、……お前は」

低く呟いた王子の深い紫水晶が、あたしの手を引いてエスコートして下さいってた弟殿下を睨み据える。

びくっ！ と肩をびくつかせたサウスリード殿下が慌てて弁明を始めて。

「いや兄上！ これはれつきとしたお仕事ですヨ！？ 魔術士長の要請があったワケだし、義姉上にはちゃんとボクが護衛に付いていましたから！ ね、ね、義姉上っ？」

同意して！ オネガイ！ という必死の眼差しにコクコクあたしも頷いた。

「護衛がお前で私が安心できるか」

冷たくそう言い放った王子が長衣を翻しこちらへ近付く　と、浮き上がった視界に今度はあたしが焦る。

「お、王子っ…！」

「暴れると危ないですよ、姫」

慌てふためくあたしにサラリと微笑み、至近距離で蕩けそうな甘い声を出されて。

こんなところでお姫様抱っこ！

恥ずかしいから下ろしてええっ！

救いを求めてさ迷わせた目はことごとく逸らされる。

何なのみんなしてー！ その“ボクなんにも見てません”的態度はー！

周囲の裏切りにぶるぶる震えるあたしをどう思ったのかキュッと抱く腕に力が入る。

だ、旦那様、何故にそんなにご機嫌なのですか。

皆様が見て見ぬふりをしてるからといって、髪とかこめかみにチユーするのは止めてください。

ふうやれやれ助かった、と言うようにそ知らぬふりで離れていこうとする弟殿下を王子が呼び止める。

「サウスリード。久しぶりに稽古を付けてやるう、来なさい」

……王子はにこやかに仰ったというのに、サウスリード殿下の顔色がものすごく優れないのはどうしてなのかしら。

王子の部下らしき黒軍服の青年たちに励ますよう肩を叩かれ、サウスリード殿下はガツクリと頂垂れた。

結局その日も王宮に滞在することになり、ご兄弟たちと晚餐を楽しんだあと。

（取りあえず双子殿下のおねだりは、王子の笑顔の“駄目です”にて却下され、あたしは胸を撫で下ろした。ラウレス殿下がまた無口になられていたのが謎だけど。そしてサウスリード殿下と言えば昼間王子にしごかれまくったせいかな姿が見えなかった）

昨夜をなぞったように浴室で侍女の方々に隅から隅まで磨かれ、疲れはてたあたしは部屋に入るなり寝台に倒れ込んだ。

明日……、明日は絶対に帰る！

王妃さまに引き留められようが下の殿下方にねだられようがもうおうち帰る……！

始終誰かに見られている王族の生活は、伯爵家の姫といっても放任で育てられたあたしには向いてないと骨身に知れた。

肩が凝るし気が休まらない。

ほんと、王子が婿入りと言う形でうちに来てくれて助かった。

王宮に嫁入りだったら数日しないうちにあたし離婚を考えてたわよ。

カタリと静かに誰かが入ってくるのに気付いて、ウトウトしていたあたしは目を開けた。

「……カノンの？ 上掛けの中に入らねば風邪を引きます」

笑みを含んだ柔らかな声が降ってくるのと同時に、髪を柔らかくすかれる。

コシコシ目を擦りながら起き上がったあたしはボンヤリ王子を見上げた。

「ん……」

苦笑の気配と共に落ちてくる口づけ。

「そんなに無防備にされると……止まりませんよ……？」

「……止まらない？ 止める、必要があるの？」

寝ぼけた頭がそう言って、ついはむように与えられるキスを受けるままになっていた。

それが段々と深くなって、寝ぼけとは違う理由でボンヤリしてきた。

包帯を巻かれた手を取られ、感じるか感じないかのキス。

「……、お、うじ……」

「こんな小さな手で……世界を守られているんですね」

ホロリと、自分の内で堅く抑えていた何かが崩れるのを感じた。  
魔法のあたしに魔法をかけるアメジスト。  
最初から、囚われていたのかもしれない。

首筋を銀の髪がくすぐって、あたしは身をすくめた。胸のリボンをほどかれて、簡単に肌が露になる。

昨日も思っただけど、なんでこんな頼りない寝間着なのかしら。寝てる間にはだけちやうじやない？

と、余所事を考えていられたのはそこまだった。

素肌を這っていた唇が、時折強い刺激を送ってくるのに、あることを思い出してあたしは王子の髪を引っ張った。

「っ、あ…、あと、つけちゃダメ…っ」

「……なぜ？」

「侍女さんたちにつ、見られると、恥ずかしいでしょ…っ」

一瞬虚を突かれたように丸くなった瞳が、真っ赤になってるあたしを写す。

パタリと王子の頭が伏せられ、次にクスクスと笑いに揺れた。  
響いて、くすぐったいってば。

「そんなにかわいいことを仰らないで下さい……、必死で抑えているのに」

「な、…ひゃんっ?!」

からかうな、と文句を言おうと開いた唇から高い声が漏れる。

ふくらみの頂点を吸われて、体が跳ねた。

「ダ、メっ……やぁ……」

甘い痺れに支配される。

肌を舐める合間にささやかれる言葉にも震えてしまう。

まだちょっと覚悟ができてないんだけど、このまま流されちゃってもいいような気がしないでもないけど、今さら王子止まんないだろうし、いやでもっっ……！

あゝ、もういいや…、と身体の子カラを抜いて流されてしまおう、と決心したとき。

扉の外が騒がしくなった。

王子もそれに気付き、身を起こす。乱れたあたしの衣を整え寝台の傍に置いた剣を手にして。

様子を探る間もなく、駄目です、と引き留める侍女さんや宿直兵を押し退けて扉を開けたのは

「おねえさまっっ！」

「あーにーうーえー」

ヒラヒラフリルのついた枕をそれぞれ抱えた、双子殿下だった。

「お姉さま、あしたお帰りになるってお聞きしたからごいっしょに眠ろうと思って！」

「てー！」

「お兄さまばかりお姉さまをひとりじめしてズルいと思いますの」「ズルいー」

頭を抱える王子は目に入らないのか、二人は寝台によじ登り、あたしの両隣に陣取って捲し立てる。

扉で右往左往している人々に下がってよい、と合図をして、王子は諦めたようなため息を吐いた。

ええと。

「甘やかせ過ぎました……、教育係にひとこと言っておかねば……独り占めもなにもカノンどのは私の妻であって……」

ぶつぶつ言いながら上掛けをキチンと掛けてやるお兄ちゃんぶり。子供たちはキャツキャとはしゃぐ。

弟王子を挟んで向こう側、拗ねた瞳をした旦那様に小さく笑って。

ひとまず、二人きりの夜はお預けと相成ったのでありました。

ホツとした、なんて言ったらまた拗ねるかしら？

UNU

## 幕間 じぼれ話（前書き）

おまけエピソードを集めてみました。

あえて会話文のみ。

息抜きにどうぞ。

## 幕間 しばれ話

\*母と息子の会話\*

「前日夜更け、カノンが治療を受けている間のこと」

「あのね、イディ。いくら夫婦と言えど、無理強いはいけないと思うの」

「いや母上、誤解で……」

「そりゃ姫はとっても可愛らしくてついギョツとしたくなるのはわたくしにもよおく分かります。でもね、姫はまだあんなにお小さいのよ」

「いや母上？ カノンどのは私より年上、」

「怪我をしてまで抵抗する何を要求したの、貴方は」

「してません！」

「まったく、今までのらりくらりと女性と当たり障りなく付き合っていたと思ったら、本命が出来た途端これですか。女あしらいの上手さはどこへやったの」

「母上…私をどういう目で……」

「だいたい貴方は陛下に似てないようできて実はそっくりなんだから、粘着質なところなんてもうそのまま！ わたくしに許婚がいた

のも構わず強引に縁談を押し込んで、うちみたいな小国が逆らえるわけないでしょう!？」

「…そんな話初耳ですよ母上…」

「わたくしまだ十四でしたのに皆ディオンの口車にまんまと乗せられてムカつくつたらないですわ!」

「ディオンの…てラシエレット卿?」

「しかも親子二代そろって少女好きだなんて呪われてますわー!」

「人聞きの悪いこと仰らないで下さい!」

「ソウはソウで年上の女性ばかり興味を示すし……何故ですの!？わたくし可愛いお嫁さんと遊びたいのに!」

「カノンどのでは不服ですか」

「だって同居してくれないんですよ?」

「……どうして今さら市井の家庭のような悩みを持たなければいけないんだ…」

「それもこれもみんな陛下が悪いんですわッ!」

「また父上は何をやったんです……」

「あのエロ親父いいー!……!」

以下、騒ぎを聞き付けた国王が来るまで、延々八つ当たりをされる王子なのでした。

\*部下たちの会話\*

↳その日の午後、訓練終了後

「見ーたー!?! 殿下の婚約者さまっ( 表向きにはそういうことになってるようです) 」

「ちよーカワイイしお人形さんみたいだったな! 」

「声も可愛かったぞ! なんかこう、キラキラシャラシャラーなお星さまが降るような」

「…あれで殿下より歳上だってよ…」

「魔女って怖えな……」

「……………」

「いやでも! ずっと若い娘が自分のお嫁さんなんていいじゃん、オトコの夢じゃーん( ずっと若いわけではありません) 」

「殿下が少女好みとは知らなかったが」

「ほらアレじゃん、今までサラッとしたオトナの女ばかり相手にされてたから、とかー」

「とにかくあんなメロメロな殿下を見たのは初めてだ」

「…俺たちにはわかんない魅力があるんだろうな」

「……………」

「殿下、めっちゃくちや張り切ってたなあ」

「サウスリード様、最近サボってたから自業自得だけど、可哀想なくらいだったし」

「全部急所に入ってたぞアレ。それでも気をつかったのか浅くしか突いてなかった様だけど」

「いやあれは正確な分、余計にあとあと辛いだろ」

「……………」

「…俺が思うに、妃殿下は見た通りの方ではないということだ」

「うおびくった!」

「ダンマリしてたくせにイキナリ発言すんなよ」

「ドキドキさせんなー」

「で、見た通りじゃないって?」

「俺は光栄にも見学の際、傍に付く命を頂いたわけだが」

「そーだよな、ズリイよな」

「お傍で匂いを嗅ぎたかった…」

「変態」

「変態」

「変態」

「抹殺されるぞお前」

「…模擬戦の間、ずっとあの方は眩かれていた」

「へ?」

「何を?」

「呪文?」

「魔女は呪文いらずなんだぞ」

「右から五十度、尺伸ばして払う、回して突き、返して打ち、喉がから空き」

「……」

「お前は数回突きを入れられてた

お前は長く凌いだ但最终足を捕られた

お前は五合で急所を突かれ悶絶

お前は三合で側頭部を払われ失神

よかつたな、姫が剣でなく棒術の使い手であられて。命だけは助かるぞ、皆」

「……ナンデスカソレ」

「ずっと？ シミュレートしてたの、彼女」

「ちなみに殿下の剣も姫の計算では数回防いで何回か攻撃していたか」

「……ナニモノデスカ」

「魔女どのだろ……」

「いや、あの方ならいずれ王妃と仰いでも不服はないぞ俺は」

「……」

皆さん揃って素振りに行かれました。

\* 弟殿下のボヤキ\*

〜その日の夜更け〜

「うう…イテエ…兄上ひどいと思わない？ 誰のお陰で結婚出来たと思ってるの、俺が伯爵に兄上の片思い情報流したお陰じゃん？ なのにこの仕打ち… 絶対に俺、皇太子なんてやってやんないもんね、せいぜい史上初、魔女を王妃に迎える国王ってことで苦労すりゃいいんだ、ウルサイこと言っつゃつらは俺と伯爵で潰してやるから… って俺動くのかよ結局！」

なんだかんだ、ブラコン。

## 幕間 二つぼれ話（後書き）

次話の投稿は5月の頭くらいになりそうです。

お待ちくだされば幸いです。

お読みくださり有難うございました！

第十話 満月へみつるつき (前) (前書き)

待っていてくださった方、ごめんなさい有難うございます！  
遅くなりましたが、魔女ムコ第十話お届けします。  
長くなりすぎて前後編ですが……。

第十話 満月へみつるつき（前）

するりと金色の輪があたしの指に通る。

契約を意味する指に、それはしっかりと馴染んだ。

その手に絡む王子の見かけによらない武骨な手指。

「日照のもと、月詠のもと、共に根の國に下る日も」

玲瓏とした声で紡がれる、誓いの言の葉。それが魂に刻み込まれる呪だと、彼は知っているんだろうか。

「輪廻の炎をくぐるまで」

真っ直ぐに向けられた、澄んだアメジストの瞳。  
その瞳があたしを魔法にかける。

「共に」

声が、重なる。

円い月光の下、あたしたちは、くちづけを交わした

第十話 満月みづみつき(前)

「お疲れ様でした、カノンドの」

馬車の座席に敷かれた、ふつかふかのクッションに大の字になって埋もれたあたしを見て、王子が苦笑する。

だらしない格好ですが許していただく。何しろさっきまで王妃さまから双子殿下に至るまで、盛大な見送りを受けていたところなのだ。

王妃さまに「今度はわたくしからの正式な招待状を送りますわね」と手をニギニギされ、

サウスリード殿下には「兄上が居ないときに改めてゆっくりお話ししましょうね」とほっぺチューをかまされ（そして怖い目をした王子が弟殿下を近衛に引き渡し）、

やっぱり皆の前では無口になられてるラウレス殿下は、それでも会釈をしてくださったし、

双子殿下には「また遊びに来てくださいますね」「きてね」と腰タックルされ、

や、あの、うーん、なんであんなに大歓迎だったんでしょう。

こっそり攫われたからこっそり帰るはずだったのに、思いきり目立っていたし。

現状、表向き（王子の呪いの件を知ることが出来ない立場の人たち）には、あたしと王子は婚約関係にある、ということになっている。

王子が、王位継承権を捨ててあたしの婿になることや、うちに住んでいることに関しては何故か皆様見て見ぬふり。

親父、どんな二枚舌を發揮したんだろ。

あたしが王子の婚約者になることについては、身分的には問題がない。これでもラシェレット伯爵家は王家に並ぶ旧家だから。

逆に、血筋で言うならうちの家族ほど怪しい出自揃いの者はいないんだけど。

母が異国出身の魔女だということだけじゃなくて。

うちのちゃんぽらんぽらん親父　現ラシェレット伯、ディオーン・ユリアス・ラシェレットは祖父母の養子だから。

っていつても、血は繋がってるのよ。

親父が小さい頃亡くなった実父が、前ラシェレット伯（お祖父様のことね）唯一の息子だったらしいから。

なんで“らしい”っていうかとゆーと、彼　ユリアスは、親父が生まれる前に死んだはずの人物なのだ。

今からざつと六十年前。ブランシェリウムは南のザーアットとの戦を長い間続けていた。

前ラシェレット伯の息子はその戦の最中行方不明になり、彼の姿が最後に確認された状況から戦死されたものとして、国では葬儀までされていた。

ところがその十九年後、ひょっこり彼の息子だと言う人物が、ラシェレット伯爵家の家宝である剣を持って現れたのだ。

それがうちの親父。

何でも、深手を負ったユーリアスさんは瀕死のところを流れの民である娘さんに拾われ、一命をとりとめたんだって。

しかし死にかけて後遺症がスツカリサツパリ自分のことを忘れていて、成り行きのまま彼女と一緒に過ごすうちに、お約束通り、まあそういう仲になり、子ども（親父）が出来て……、という言ってみればよくある話。

両親が相次いで亡くなったあと、親父は、後年記憶を取り戻していたけれど国には帰らなかったユーリアスさんの言葉に従い、その剣を彼の実家に返しに来た次第。

親父はそのときのことを、

「じいさんばあさんの顔見れりゃあよかったんで、剣渡したらそれでオサラバするつもりだったんだけど、黙ってたのに何でかユーリアスの息子だつてバレちゃって、“老い先短いわしらを置いてどこ行く気じゃー”とか泣き落としから脅迫まで色々手をつたれまくって、気が付いたら後継ぎにされて今に至る」

なんて、へらりと笑って言った。

お祖父様とお祖母様は金髪に緑の瞳、その息子のユーリアスも同じ。

親父は実母に似たらしく、真つ赤な髪に金翠の瞳。外見もそちらの血が濃くて、印象からして貴公子然としていたユーリアスとは正反対だった。

あたしたち魔女は、不可視の眼があるからお祖父様と親父の血縁関係がわかるけど、普通の人は当然ながら見ただけじゃわからない。だから、最初はカタリじゃないかって疑われてたみたい。

たまたま手に入れた剣を利用して、伯爵家の後継ぎにおさまったなんてのはいいほう。

親父はああいう性格だから飄々と陰口や誹謗中傷を流してたみたいだけど、聞き苦しいこともかなり言われていたらしい。

当の、親父を孫だと認めたお祖父様は、「へらへらしとる馬鹿っぽいところがそっくりじゃった」なんて言ってるけど、どこまで本気なんだか。

そういう事情で血筋という面から見ると、とっても怪しい素性である親父なんだけど、現在はやり手の外交官として辣腕を奮っていて王宮ないし他国でも一目置かれた存在。

どういうわけだか陛下の信頼も篤いみたいだし。（絶対口で騙くらかしてるんだわ）

そうでもなきや、いくら伯爵令嬢という肩書きを持っていても、あたしが王子の配偶者なるのは難しかっただろうな。

チラリ、と向かい側に座る夫の姿を見る。

さらさらの銀の髪。触ると、つるつるで柔らかいの。  
アメジストの瞳は、お日さまの下では明るく澄んでいて、月の下では深く謎を秘めた色になる。

その瞳で見つめられたら、なんにも考えられなくなる。

唇のやわらかさとか。

触れる手の意外な逞しさとか。

腕の中にいる心地よさとか、

もう、あたしは知っている。

きれいな顔で、いつも穏やかに微笑んでいるかと思ったら、公の場で見せる王族としての厳しい顔もあつたりして。

王宮に来て、色んな顔の王子を見た気がする。

クッションに埋もれたまま黙っているあたしをよほど疲れたと思っ  
ているのか彼は気遣わしげに言うてくる。

「母が何か言っていたようですが、真面目に相手をなさらなくても結構ですよ。今にも公的な行事がなくて、暇をもて余しているだけなんですから」

うーん、でも、相手は王妃さま。かつ旦那さまのお母君だし。こ

機嫌でいて貰いたいじゃない？

それに。

今度はゆっくりとイーディの昔の話でも聞かせて差し上げますわね

イタズラっぽく囁かれた言葉に、とっても興味があるワタクシですのよ。

ちっちゃいころの王子の話。

聞きたいって思う、あたしがいることを彼は分かっているのかしら。

長い足をキュークツそうに折り曲げて窓の外に目を向けている王子を、じいっと見つめた。

見つめるあたしに気づいて、不思議そうにしながらも、ふんわり笑う。

彼の笑顔を見ると、胸の奥で蝶が羽ばたくような、くすぐったい気持ちを覚える。

その気持ちに、どっという名前がつくのかも、もう、分かっている。

……なんかまんまと親父の思惑にハメられた感じがして、ムカつくんだけどさ。  
仕方ないかな。

……ところで。

「王子？　なんかすごく時間かかってませんか？　遠回りでもしてるんですか」

王宮から家まではそんなにかからないはず。外れとはいえ、一応一の郭の範囲内ギリギリに家はあるんだから。

もう、着いてなきゃおかしいよってくらい馬車に乗っている気がするんだけど。

カーテンを揺らしてそつと外を覗いてみると。覚えのない景色の中にいた。

んん？　街中を走っていたと思ったんだけど、緑しか見えないぞ。いつの間に城下から出てたんだ。

「城より少し離れたところにある別荘に向かっているんです。もうすぐ着きますから」

は？　と向き直るあたしに微笑んで。

「公的に式を挙げたら、それどころではありませんから。少し早いですけれど、新婚旅行ということだ」

いやいやいや。あたしはどっこいッッコんだらいいの。

公的に式を挙げたら？

（待て、式をするのか。公的ってことはまさか国を上げてとか言わないでしょうね、）

それどころじゃない？

（なにがあるのっつ）

新婚旅行？

（えええええッッ！？）

それに、と続けて王子はあたしの額に指先を当てる。

「まだ本調子ではないでしょう？」

怪我をした手のことだけを言ってるんじゃないって、わかった。

王子の呪いを魔力押しで封じたために、あたしの体魔力値は底辺のままだ。身の内を巡る気の循環が狂ってる。

微熱のあることは自覚してたけど、王子がそれに気づいてるなんて思わなかった。

「王宮では気の休まる暇がなかったでしょうし、伯爵邸に戻れば仕事を始めるでしょう、貴女は」

ぎっくー。バレてるー。

一応説明しとくとね、今現在、うちの領地の管理の半分はあたしに任されてる。隠居してラシェット領にいるお祖父様が直接あちらを管理してるんだけど、決定権というか采配はあたしがしなきゃいけないのよ。

ホントなら仕事を任せられる結婚相手を適当に見繕って、あとを継いでもらえば一番良かったんだけど。

うちは貴族には珍しい、代々恋愛結婚派なので（だから旧家だけどいまいち貴族からはみ出してる）無理にあたしに婿とりをさせるようなこともなく、今まで来てしまった訳。

母様の故郷では結婚の制度そのものがないようなものだし。子どもは母の一族に属するものとして育てられるから、父親の血はあまり関係がないの。

でも、あたしはブランシェリウムに戸籍があつて、伯爵家の総領娘でもあるから、そういうわけにもいかなかった。

あたしが緋の魔女としてもブランシェリウムの貴族令嬢としても特異で中途半端な理由。

爵位を継ぐ旦那様が見つからないなら、必然的にあたしが魔女をしながら女伯爵にならなきゃいけない。

もしくは、どちらかの立場を捨て去るしか。

親父は六十になつたら隠居する気満々だし。そういうことから、徐々に仕事を任せられてるの。

今、こうして立派な婿どのをいただいたワケですが、王子に仕事を任せるわけにもいかないし。

能力的な意味じゃなくて、立場的な意味だよ。

最終的にはあたしの子どもに爵位を渡すことになる。

でもここで新たな問題。

生まれた子どもがまた魔女だったら？

王子は王位継承権を放棄してるけど、子どもには与えられるし、その時点で今一位のサウスリード様に子がいなかったら順位の変動が起こる。その場合は？

でもってまた伯爵位が宙ぶらりんになっちゃうのよ。

ってあたし、王子があたしの子ども父親って何決めつけてんのー！

気が早すぎるし！

まだヤツてもいないのに！！（あら失礼）

一人で考え込んだり赤くなって慌てたりするあたしを、王子はやっぱり不思議そうに見ていた。

着いた場所は森の中。  
濃い自然の気が感じられる場所だった。

王子に手を取られて馬車から出ると、目の前には小さなお家。  
田舎のおばあちゃん家という言葉がふさわしい印象の、暖かみのある建物がそこにあった。

王族の別荘にしたら慎ましやか過ぎるけれど、あたしは辺りの自然とも調和しているその家が一目で気に入った。

白い壁にレンガのアクセント。茶色の屋根。小さな花を付けた蔦

が這ってる、可愛い！

ウキウキとお家を見上げてキョロキョロするあたしに王子が微笑んで手を引いてくれる。

「ここなら貴女の回復にも丁度良いかと思うんですよ。使用人も管理人夫妻だけです。気を使わずゆっくりできますからね」

あたしが人の多い王宮で気疲れしてたのもお見通しデスカ。

玄関の前でにこやかにこちらを見ている老年の男女がおそらくその管理人夫妻なんだろう。ホントにおばあちゃん家に来たみたい。

いささか貴族令嬢として変わった育ち方をしているあたしは、常日頃から人にかしずかれることを苦手に行っている。

そりやうちにも使用人はいるし、あたしは主として彼らを使う立場にいるワケだけど。彼らはあたしの家族だし、微妙に余所とは違うんだよ。

大体あたしが身一つで王宮にいたことも本来ならとっても変なこと。

普通自分付きのメイドとか連れていくものだもんね。

だつてさ、無駄じゃない？

自分のことは自分でできるし、正装するときにはさすがに人の手を借りなくちゃいけないけど、普段の生活でメイドが必要な時ってないんだもの。

そうしなければいけないときはお姫様として振る舞えるけど、到底お姫様にはなれない。

あたしの根っこはどうしたって、魔女なんだから。

そういつあたしでも、王子はいいの？

さつきは新婚旅行とか言われて動揺しちゃったけど、いい機会かもしれない。

呪いの理由、

王子を知ること、

それに何より、ずっと前からあたしを知っていたらしい、その訳も。

ここでなら二人きりで邪魔が入らず、話し合える。

分かり合う時間が持てるよね。

案内された部屋はやっぱりこじんまりとしていて、可愛くて、ベツドカバーのキルトも飾られた花もあったかくて気の休まる感じがする。

管理人夫人に手伝ってもらって、ドレスを脱いで、簡素な部屋着を着たら、もういつものあたしだ。

夫人が運び込まれた荷物の中から取り出したのは、緋色グラデーシヨンのワンピース。胸下で絞ってストンと落ちるデザイン。スカート部分は何重かのフリルになっていて歩くとヒラヒラ足首に纏わりつくのがなんととも言えず乙女心をくすぐる。

シューズもヒールのない柔らかい素材で出来ていて、まるで裸足のよゆに感じられる。

「お可愛らしいですわ、殿下もお喜びになるでしょう」

複雑に編み込まれて重かった髪をほどき、丁寧にとかしつけながら夫人が微笑む。

なんであたしが可愛いと王子がオヨロコビなんだろうと首を傾げる。けど、あたしが軍服姿のカッコイイ王子を眼福だわと見とれるようなものかしらと思い、ニコリとお礼の笑みを浮かべるにとどめた。

横の髪を少しとって、軽く捻ってうなじの辺りでまとめた髪型は、変に子どもっぽくもなく、気に入った。

っていうか、さつきからあたしどうも浮かれてる感じなのよね。

なんでかしら、自然の気が濃いから？

新しい服のせい？

それとも

「カノンの。天気もいいし、外で昼食にしませんか」

同じように軍服を脱いで、ラフな格好になった王子が扉から顔を出す。あたしはピヨコンと立ち上がって彼のところへ行った。

ただ白いシャツを羽織っただけでもカッコイイって得だなあ、と美人な旦那さまを見上げると、彼はまじまじあたしを見下ろして、なんか付いてる？　なんて頬に手を当てた。

「良かった。よくお似合いです」

上機嫌な笑みと共にキスが降ってくる。

にゃああああっ！

人前っ、まだ夫人がそこにいるのにつ！

微笑ましそうに見られてますがー。

しかし、「お似合い」はいいとして何故に「良かった」？

疑問に思ってからハツとした。馬車から運び込まれた荷物。てつきり家で用意して貰ったものだと思ってたけど。

このワンピースみたいに、新しいものだとしたら？

「王子、この服……」

「私が見立てたんですよ。お気に召しました？ あとで他のものも着て見せてくださいね」

まさかもしやと思ったけれど。

他のつてナニ、いつの間に用意したのー！？

あたしのサイズにピッタリだけど、子供服っぽくないってことは、フルオーダー？ ものすっごい着心地いい軽い素材、いくらしたのっ？！

「カノンどのは装飾品はあまりお好きでないと聞きましたので。普段にも着れる、こういうものなら喜んで頂けるでしょう？」

もったいないなんて野暮なことを言いかけたあたしの思考を先回りして、拒否をさせない辺り王妃様の血だ。

しかも、「妻を美しくするのは夫の役目ですよ」なんてサラリと言われちゃったら、受けとるしかないじゃない。

服が素敵なだけに。

アリガトウゴザイマス、って言うだけでそんなに幸せそうにするんだもん。いくらだって着せ替えしてあげるよって気になっちゃう。

木陰に敷物を引いて。

大きなバスケットに入ったパンや野菜、ミートローフやハム。

王子は器用にそれらをちょうど良いサイズにカットして、サンドイッチを作ってくれる。

ちよつとしたピクニック気分だ。

簡易コンロに火を起こして手際よくお茶まで淹れて、それがまた美味しくてあたしがいちいち驚いたり感心したりする様子に彼は苦笑した。

「戦に出れば野営するときもあるんですから。一通りのことは出来ますよ」

だって王子様なのに。

「戦場では、そんなことを言ってもらえませんしね」

戦場って。

数年前までは確かに周辺国は落ち着かない体制だったし飛び火することもあったけど。

親世代が頑張ってくれたお蔭で、徐々に平穏が浸透してきているの

に。  
「わたしの初陣はアシス国境の戦でした」

聞き覚えのある地名にあたしは瞬く。

西の国境。ドラウード公国との間にアシス平原を挟んだその場所で、四年前、戦があった、正しくは、戦になりかけたことがあった。

公国に属する一人の魔術士が外道を行い、個人の目的のために国を巻き込んでブランシェリウムに攻め入ろうとした、あの出来事。

その場所にいた？

「前線の指揮を任されていました」

その意味するところは。

「うえええ　　ッ！??？」

仰天のあまりハシタナイ叫び声を上げたあたしを楽しそうに王子は見る。

いたのか！　あの場に！！

いっぺんにあのときのことか脳裏に蘇り、筆舌に尽くしがたい羞恥にあたしは悶える。

あああ！　穴があったら入りたい　　！！

前線にいたってことはまさにあのあれを目撃されたワケで！　あ

あそれで以前からあたしを知っているようなこと、

頭を抱えて恥ずかしさに耐えるあたしをぎゅっと腕に閉じ込めて、  
「どうしたんですか？」なんて言う。

どうしたじゃないし！

若気の至りっていうか考えなしの暴走を知られてるなんて――！

「一目惚れだったんですよ」

ひ？

困惑したまま王子を振り返ると、逃げ出したくなるような、愛し  
いって眼差しで言ってるような瞳が、あたしを見つめていた。

つづく。

第十一話 満月へみつるつき（後）

一目惚れだったんですよ

そんなことをとるけるような笑顔で王子に言われて、冷静でいられる女がいるだろうか、いや無理無理、大・混・乱・ですッ！！

「ひ、一目惚れされるような要素どこにもなかったと思うんですけどっ」

あわあわしつつも年上としての余裕を見せなきゃ！ なんて無駄な見栄を張り、言う。

「そうですか？」

両軍がぶつかろうとするあの場に、たった一人で現れた貴女は見惚れるくらい凜と美しくていらっしやいましたよ」

クスクスと、照れるを通り越して煮えそう、否、煮詰まりそうになってるあたしの膝に置いた手を取って、旦那さまは指先にくちづけを落とす。

まなざしがひたすら、甘い。

全開…ッ、全開だ、王子ッッ！

赤いどころか黒くなってるんじゃないだろうか、あたしの顔色。

王子の眼に映った部分が燃えそつに熱い。

「同じ国のすぐ傍で」

手を握っていた王子の指先がするりと手首の内側を撫でる。

「貴女が存在していたことを、それまで知らず、気付かずに、生きていた自分が、とても間抜けに感じました」

トクトクと血潮が流れるその辺りを大きな手のひらが包み込み、鼓動を重ねるようにしばらく王子は言葉を切る。

「こんな小さな身体で」

捧げるように持ち上げられて、皮膚の薄いところに唇が押し当てられる。ぞくぞくと小さな火花が背筋を走った。

「だけど、貴女はあの場にいた誰よりも高潔で偉大な存在でした」

惚れない男がいますか。

いやいやその理屈でいくと、あつこにいた野郎共みんなあたしにまいつちやうことになるから。「見る目がないですね?」「じゃなくて。王子の目が変わんだよ。」

「礼を。まだ貴女に言っておりませんでしたね」

秀でた美しさを見せる額にあたしの手を押し当てて。

「貴女のお蔭で我が民が傷付くことなく戦が終わりました。感謝を、  
緋の魔女永和」

そんなこと。

そんな感謝をされる事をしたわけじゃないのを自覚しているだけに、いたたまれない。

「……ほんとは、しちやいけないことだったんだよ」

ポツリこぼした弱い声に、王子の眼が瞬く。

あたしがあの日戦場に飛び込んだのは、完全に先走った行爲だった。

まだ確証もなく、一族の決議も得られていないのに、我慢が出来ずに飛び出して、ハツタリをかましたんだ。

あたしには見えていた、闇の色。

あの男が、邪道を行い、魂を穢し、世界の理を枉げようとしていたことを。

あたしは分かってしまったから。

長たちは秩序を守るが故に、目に見える確証がなければ動けず。

だけど。

一族が動くことが出来る条件が揃う、ほんのわずかな時間、ほん

の少しの逡巡、その所為で。

どれほどの血が流れ、命が奪われるのか、見えてしまったから、

懲罰を覚悟の上で、あたしは飛んだんだ。

『 両軍、退け！ この争いは我らが預かる！！ 』

平原に降り立ったときは、もうヤケクソで。

たぶん、ブランシエリウムの陣営の奥にいる親父が今頃眼を剥いているだろうなあ、なんて内心半笑いで。

このさいだからと思い切りチカラを振るったんだ。

王子はあたしが平然としてたように思ってたみたいだけど、実際は口から心臓が飛び出そうなくらい焦っていた。

それまでも、緊迫した場に自分を置いたことがないわけではなかった。

緋の魔女として仕事を任され、見知らぬ国の支配者と対等に振る舞うこともしてきた。

でもそれは後ろに仲間がいてのことで。

あんな風に一人きりじゃなかった。

自分一人に数刻後の世界の行く末が委ねられたあの重圧。

ひとつ間違えれば、あたし自身が災いになりかねなかったあの状況。

今思い出しても喉が詰まるような恐ろしさがある。

結果を見れば、あたしの行動は更なる悲劇を防ぐのにこれ以上はないというタイミングだったのだ。

あの魔術師が、陣営関係なく全ての兵を贄にして行おうとしていた外法。

その術式が完成しようとしていた寸前に、あたしがそれをぶっ壊した。

結果オーライということで、たいしたお咎めはなかったんだけど。

「あたしは緋の魔女なんだから、あんなふうに感情に任せて動くべきじゃなかったの」

自国だからって、特にブランシエリウムのカタを持つつもりはなかったけれど、後でそのことを取り沙汰されて内々で揉めたことは言わない。

自分の国に被害がありそうだったから、掟を無視して動いたんじゃないかと。

なのに何の咎めもないというのは問題があるのではないかと。

緋の魔女も一枚岩ではない。

特にあたしは一族でありながら里に属さず、特例としてブランシエリウム貴族としての戸籍を持っているから、それを不満に思う者たちからの非難があつて。

長の血筋の癖に。

身鼻肩が過ぎるのではないかと。力が強いからといってあの行

動は傲慢ではないかと。

か。そもそも何故あの娘だけが外界で生きること許されているのか。

あたしが生まれたときから時折浮上するその問題。

あたしが緋の魔女として特例も特例な生き方を許されてる理由。それは親父が母様と出会った頃に、一族と世界に対して貸しを作った出来事によるものなただけ。

あのことで母様にも迷惑かけちゃったしなあ。

あたしとしては、もっと上手く動けなかったかな、と反省する。

世界の秩序を守るとか、外法が許せなかったからとか、そんな立派な理由じゃなくて。

止められるチカラを持っているのに動かずにいることが我慢できなかった。

傲慢と言われればそうかもしれない。

あたしなら、止められるという確信があったんだから。

「……………それでも、あの時貴女がそうしなければ、我が国の民だけでなく、たくさんの命が無意味に奪われていたんです」

俯きながら言い訳をするあたしの顔を長い指が上げさせて、ヒタと真摯な紫色が見据える。

「緋の魔女としては良くない行動だったかもしれませんが 国を統べる立場にいる者として、貴女の行為を尊重し感謝いたします」

どうして。

貴方はいつもあたしが楽になる言葉を探し出してくれるんだろう。

あの行動が、正しいものだったなんて、胸を張って言えないけれど、でも、後悔はしてないの。

たくさん命を救った、なんて自慢をするつもりもない。

でも、こうして労われるだけで、ほどけていくものがある。

間違っただけじゃなかったよね？

誰に非難されても、一人だけでも、こうしてあたしを肯定してくれるなら。

あのとときの無謀なあたしを誉めてあげることが出来る。

「カノンの」

ほろほろ涙を落とし出したあたしを、強い腕が抱きしめた。

ああ、あたし、もう一人で頑張らなくてもいいんだ。

緋の魔女として。

伯爵家を継ぐものとして。

両方を両立するために、いろいろ堪えて頑張ってきた、その弱音を、彼の前では隠さなくていいんだ。

貴方と結婚するって、そういうことだよな

？

ちゅ、とこめかみに王子の唇が触れては離れる。

……えーと、なんと申しますか。

王子の立てた膝の間にワタクシ座らせておりますの。

後ろから抱っこされるみたいに。腕で囲い込まれちゃったりなんかして。

い、いちゃいちゃ……、いちゃいちゃ、まがう方なきコレはいちやいちゃだああー！

そりゃここは私邸で、周りに誰もいないことになってますが。

実際はある程度の距離を保って近衛の人はいるし、それにそれにそれにだ！

「……うっわーラブラブだあ、あの永和が〜」

「ちよ、ここからじゃ見えないよ、ダンナの顔ー。ナギ、退いてよ  
う」

「やあん」

ガサゴソ。

……。

王子、気付いてないはずないよね、気配に敏感いひとだもの、なに

上機嫌で更に拘束するのですかあああっっ！

「だあっ！」

がばりと立ち上がり王子の腕から逃れる。向かって右側の茂みを指差し。

「とつとと出てきなさいよそのデバガメ連中！ 覗き見とはいいい度胸だわッ」

「やあだ、永和ったらコワイ」

「アレよ、いちゃいちゃ邪魔されたから」

「……雷撃落とすよ」

ドスの効いた声で再度促すと、ようやく姿を見せる。

緋色の二人組。

あたしの友人達だった。

「みんなからの、結婚祝い、届けに来たのよお」

なにが入ってるんだかずだ袋を引きずりながら草木を掻き分けやってくる。

のんびりした話し方のお色気娘はナギ。

「私たち永和 カノンの、幼馴染なんです。申し訳ありません、突然押しかけて」

そつなくにこやかに王子に話しかけるのはヒサメ。

2人はあたしの緋の里での幼馴染で悪友、もちろん魔女。

突然すぎるわ！ 姿を隠してここまで近寄るって近衛の人の立場がないじゃんか！

目線で侵入者に気付いて慌てて駆け寄る隊員さんたちを抑えて、王子は2人を笑顔で迎えた。

うつつ……ことごとく失礼な身内ばかりでごめんなさい、王子。

「初めまして、イーディアスと申します」

そんなとびきりの笑顔向ける必要ないから。

ていうか仏頂面で充分だから。

案の定、王子を見上げてぽうつとなってる2人を牽制する位置であたしは彼女たちを紹介し、お祝いだとかいうあやしい袋を受け取る。

「ドウモアリガトウ、ホカノミンナニモヨロシクネ、ジャアマタネ」

「うわ棒読み！」

「追い返す気満々ねえ」

おつともさ。

うちの旦那さまに余計なちよつかいを出されてはたまらんのよ。このカップルクラッシュアズメ。

「永和のくせに独占欲丸出しだよ……」

「成長したのねえ、…胸以外」

「あんたたち不法侵入で警備に引き渡して欲しい？」

言ってから気付いた。駄目だ、近衛は2人の好みのいい男揃いだ！ 王子の大事な部下をこいつらの毒牙にかける訳には……！

「カノンどの、私は席を外しますね。久しぶりにお会いになられたんでしょう？」

ふわりと肩を抱かれて、王子は微笑む。

……ホント、出来たひとだわ。

らぶらぶよ、里のみんなに良いネタが出来たわ、と丸聞こえで言い合う友人たちを黙殺して、あたしは王子にごめんね、とささやいた。

「でさ。あんたに頼まれてた件だけ」

「旦那さま、厄介なのに気に入られちゃったみたいねえ？」

王子の姿が家の中に消えて。

近衛の人たちもどう指示したんだか、気配が感じ取れないくらいに遠ざかって。

耳も目もなくなってから、あたしは念を入れて周囲に結界を張った。

完全に遮断されたたん、ガラリと雰囲気を変えたナギとヒサメに苦笑する。

「わかったの？」

「手こずったけどね。そいつがあまり知られてないからじゃなくて、逆」

「みんな、関わりたくないんだって」

「……同族にそう言われてるの？」

王子にかけられた呪いを知ってすぐに、あたしはナギとヒサメに連絡を取った。

こんなで一応、2人は対魔族を専門としてるのだ。

魔族って言っても様々、人間にも色々なひとがいるように、中には普通に付き合えるのもいる。

なら、友好関係が広く(どういう友好関係かは訊かないこと)、いざというときの対し方も詳しい彼女たちに教えてもらうのが手っ取り早い。

そう思って。

ヴァンセリアル、そういう名前の魔族を知らないか

伝言を送って、まさか昨日の今日でこんなとこまで来るなんて思ってたかったけど。

「みんなウンザリした顔するのよねえ。その名前聞いて」  
「災厄そのものだから、関わらないほうがいいって」

……一体。

「魔族としての力は上級」

「行動原理は自分が面白いかどうか」

「相手が誰であっても、自分の好き放題」

「一度目をつけられたら逃げられないと思った方がいい」

「ヘタに手出しすると恐ろしいことになるから、流しとけて」

畳み掛けるように並べ立てられる情報に、あたしは地面にめり込みそうになった。

なんなんだソイツは！

混乱を好む魔族だから覚悟してたけど、同族にもそう言わせるってどんななの！

「とにかく面倒くさいらしいよ」

「ガンバ、永和！」

専門家の2人にかかってもどうしようもない情報ばかりのようだった。無責任な励ましを投げってくる友人に恨みがましいまなざしを送る。

「……ソイツの領域は？」

「わかんない」

「みんな知らないの」

「いっせーの、で声を揃えて。」

「「関わりたくないから」」

王子——！！

「貴方一体どこでそんな変質者引っ掛けてこられたんですか——  
ッ！！」

「関わるなって、関わるなって、こっちは旦那さまの命がかかって  
んのよ！」

あまりのことに絶叫すると、2人はアハハと軽い笑い声を立てた。

「しかも永和ったら既に呪を封じちゃったでしょ？ ケンカ売った  
に等しいよね」

「うん、そのうちあっちからやって来るだろうし、慌てて探さなく  
てもいいんじゃない？」

他人事だと思っただけ

！！

「ってことで。」と、二人はずだ袋を引き寄せた。ガサゴソと中か  
ら様々なものを取り出して。

「これ、アマザから滋養強壮剤」

「こっちは催淫効果のあるアロマ」

「ユヅカから子宝に恵まれるお守り」

「フミヲから“どんな幼児体型でもバツチリ・これでイチコロベ  
ビードール”」

「あと永和にはちよつと早いかもだけど、アレなオモチャ……」

「帰れ！ 今すぐ帰れ！！」

皆が何を考えてるのか知らないがロクなことではない。  
何だこの夜のオトナグッズは！

真つ赤になつて湯気をたてるあたしに、その反応が見たかったの  
よと言わんばかりにケラケラ笑う。

「いやあ、アンタ跡取り作つとかないといけないでしょ」

「相手も一国の王子だからねえ」

あたしたちがどうにかなるのを前提に話さないで頂きたい。てか、  
みんながみんなそんな反応かつ。

「冗談じゃないわよ、相手が誰であるーと負けるつもりなんかない  
からね！ けちよんけちよんにしてやるもんね！」

きいつと勢い込んで叫ぶと、おおー、なんて気の抜けた拍手が帰  
ってくる。

……遊んでる、遊ばれてる、完全にっ。

脱力して地に身体を投げ出す。そんなあたしを眺めてクスクス笑  
いながら、ヒサメは肩をすくめた。

「永和が本気出してソイツと争うと、この国焦土と化しそうよね。そのときは守護結界くらいなら張ってやるから、教えなさいね」

あたしたちしかない空間に、うふふつと無駄な色気を振り撒き、ナギも微笑む。

「他の魔族相手のフォローくらいはしてあげるわぁ」

そんな軽口を装って申し出された内容に、不覚にもあたしは言葉に詰まってしまった。

それは、裏を読めば味方に付いてくれるってことで。

掟があるから、みんなは直接この私的な争いには関わったりできない。

でも、そうして後ろを守ってくれる相手がいるってわかっていれば、いつもは躊躇う全力を出せるってことで。

このオフザケみたいな贈り物をくれた連中も、“そのとき”は力になってくれるのだという意思表示なんだ。

実際には、そう簡単なことじゃないのもわかってる。

緋の魔女は世俗のことに関わってはいけない、

その力を私欲のために使ってはならない、

自分に降りかかる火の粉を払うことまでは禁じられていないから、あたしは夫の敵である魔族と戦えるけれど。

みんなが、あたしに力を貸してくれるということは、大なり小なり何らかの罰則を与えられる。

それを覚悟の申し出に、あたしは、また泣きそうになった。

何なのもう！

今日はみんなしてあたしを泣かせる日なの？

あたし、こんなに感激屋さんじゃなかったはずなのに。  
情緒不安定なわけでもないけど。

あたしったら、しあわせ者なんじゃん、なんてこっさり思った。

騒がしい珍客が厚かましく夕食まで食らってゆき、近衛のおにーさんたちに愛想を振り撒きつつ去っていった、あと。

彼女たちがここまで訪ねてきた本当の理由には何も触れず、王子はあたしを裏手の湖まで散歩に誘った。

手を繋いでゆつくり歩く。

月光があたしたちを淡く照らしていた。

「具合はいかがですか？」

「うん、全然平気。ここは自然の空気が濃いから、普通に過ごして  
るだけでも回復は早いのだ」

そうですか、とやわらかく微笑む王子に、あたしは「それで？」と促した。

「何かお話があったんじゃないんですか」

ぱちぱち瞬きしたあと、敵いませんね、なんて笑って。

王子は深呼吸してあたしに向き直った。 ひざまつく。

「いまさら、と思われるかもしれませんが……逃げるのはやめました」

キョトンとするあたしの手を取って、胸元から取り出した、それを手のひらに重ねて置く。

「貴女を縛りたくなくて だけど想いは消せなくて 浅ましく、呪いのせいにして、傍へ来てしまった私を赦してくださいますか」

……赦すもなにも、もう、そういう次元じゃなくなってるのに、律儀に問う彼が愛しかった。

愛しいと、思うように、なっていた。

手のひらに置かれた小さな金の輪の感触に、その意味に、鼓動が早くなる。

ドレスの裾に口付けて、あたしを見上げ、王子はまるで慈悲を乞うように、アメジストの瞳を揺らめかせた。

「 貴女を愛しています。」

カノン・永和・ラシエレット。私と、結婚してください」

ぎゅっと瞼を閉じる。

重ね合わされた手を、握り返す。

はい。

震えた、自分でも聞き取れるかという微かな声。

それを王子が確かに受け取ったと分かったのは、彼が綻ぶような笑顔をその面に浮かべたから。

するりと金色の輪があたしの指に通る。

あたしも、もう片方を取って彼の指に通す。

契約を意味する指に、それはしっかりと馴染んだ。

両手を重ね合わせて、視線を合わせた王子が、その形のよい唇を開く。

「 日照のもと、月詠のもと、共に根の國に下る日も

」

玲瓏とした声で紡がれる、誓いの言の葉に、あたしは瞬く。

東の国　あたしのもうひとつの故郷に伝わる、それは婚礼の祝詞。

淀みなく紡がれた、その言の葉が魂に刻み込まれる呪だと、彼は知っているんだろうか。

「輪廻の炎をくぐるまで」

出会ったときから真っ直ぐに向けられる、澄んだアメジストの瞳。その瞳が、魔女のあたしに特別な魔法をかけた。

唇を開く。

「」  
「」  
「」

声が、重なる。

円い月の光の下、あたしたちは、魂と運命を結ぶくちづけを交わした。

「っひゃあ!?!」

前触れもなく抱き上げられ、バランスを崩したあたしは落ちない  
ように慌てて彼の首に手を回す。

無邪気に笑う王子の顔が、すぐ傍に。

「もう、待ちませんよ。貴女を私のものにします」

嬉しそうに言われた言葉の意味を悟って、あたしは真っ赤になる。

「じゃあ、あたしも貴方をあたしのものにするから」

負けじと言い返す。

望むところですよ、なんて悪戯っぽく笑った王子は、あたしをお姫  
さま抱っこで部屋へと運ぶ。

満ち足りた月が、あたしたちを祝福するように輝く。

そうして。

ある日突然現れた、あたしのお婿様は、その夜、本当の、本物の、あたしの旦那さまに、なった。

魔女とお婿様<秘密篇・了>

## 第十一話 満月へみつるつき（後）（後書き）

おー待ーたーせーしましたー！

魔女とお嬢様 第一章 秘密篇これにてエンドにございます！

ひっぱって結局そのシーンは無しかよ！ と叫ばれた皆様すんません。

無しです。ご想像に任せます。

気が向いたり要望が多ければ書くかもしれませんが、今回はここまですー！（いや、うん、内容の雰囲気とのバランスがね……）

微妙に最終話に向けてスランプになったりして皆様に焦らしプレイをかましてしまいました。たぶん今回もヨツキューフマンなのでは……。

とりあえず！

今回はここまでッ！！

第二章は解呪篇。

呪いを掛けた相手とのバトル？になります（何故ハテナ）。

その前に、色々振ったこぼれ話を拾って番外編として書きたいと思えます！（主に両親の話とか？）

相も変わらず亀で鈍亀な更新状況ですが、これからもお付き合い宜しくお願い致します！

お読み下さり有難うございました。よろしければご感想などお聞かせ下さいませ。

小話 あまあま・デイズ

ただ甘い。

それがあたしの旦那様。

いや、王子様だからね？ 比喻でもなんでもなく、うちの旦那、王子様だからね、いろいろと価値観が違うのはわかっておりますが！

「……あのね王子、毎日毎日オミヤゲ持って帰ってくることはないのよっ。」

お仕事から帰っていらした旦那様は、出迎えたあたしにいつものようにキスを落としたあと、いいものを見つけたんですよ、とこれまたいつものように上着から包みを取り出す。

繊細な細工の髪飾り。それをあたしの髪にあて、旦那様が微笑んだ。

「カノンドのに似合うと思って」

いや、うん、その気持ちはとっても嬉しいし、プレゼントされるのが嫌ってわけでもないんだけど。

それが毎日だとね？

花やら服やら髪飾りやら小物やら甘いお菓子やら珍しい魔術書やらよくネタが尽きないっていうか。

今はいいけど、そのうち何だか義務になっちゃわなにかしらって思っのよ。

はふりと息を吐いて肩を落とすと、シャラリと髪飾りについた翡翠の珠が音を立てる。

……しかもハズレがないんだよね、王子が選んでくるものって。別に、王家御用達、とかそういう店を買ってくるわけではなく、帰り道で目についた、とか王子にとっては小銭程度の金額の物なんだけど、その品質は最上級のもので。

露店とか城下町で何故こんな品がとちよつと驚く。でもって、それを見つけてきちゃう王子にもビックリよ。

この翡翠、めちゃくちゃ良いものじゃない。それが適当な端切れに包まれて出てくるんだから、どうということ？

髪に留められた状態のそれに、王子が目を細める。

「先日、魔女のお里の民族服を着ていたでしょう？ あのドレスに似合いませんか」

ああうん、確かにね。

にこにこ上機嫌な旦那様を眺め、あたしは今日もオミヤゲ攻撃に敗北を喫したのだった。

「贅沢ですよー、お嬢様ったら」

「そうですよう、釣った魚に餌もくれない男の方が多いつていうのに」

「顔よし家柄よし性格もよし妻溺愛な旦那様もらつといて、罰当たりますよっ」

着替えを手伝ってくれるメイドたちが口々に言う。

いちいちもつともで反論できないけども。

「この勢いで毎日オミヤゲもらつてたら半年たたないうちに部屋が埋まるし……」

すでに棚の一部を占領している贈り物をあたしは半眼で見た。  
王子のお財布の心配はしない。王位継承権は放棄したとはいえ、  
所領もあるし、働いてもいるしね。

「まあ確かに……じゃあ、こういっつのはどうです？」

「こしょこしょと耳元で囁かれたコリーンのアドバイスに、あたし  
は疑問の眼差しを送る。

「ええー？ そんなんで効くー？」

「自信満々に頷くメイド。」

「てゆうか、お嬢様が変なんですよ。贈り物くらい当然だーって思  
えばいいのに、伯爵令嬢なのに貧乏性……」

「ですよね、うち、かなり名家ですのに」

「お嬢様のお小遣い、使い道がドレスや宝飾品じゃなくて薬草の苗  
やら魔術に使う材料とかって、ねえ？」

「あんたたちちよつとは主を敬え。」

「好き勝手言われている間に支度は済み、フィナが編んでくれた髪  
を確認して、最後に今日のオミヤゲを手にとった。」

「……なんだかんだ言っつて、お嬢様もノリノリじゃないですか」

「なんとでもお言い。」

「王子のお望み通り、着物に合わせてさっき貰ったばかりの髪留め  
をつける。」

「うん、いい感じ？ 王子、喜ぶかなー。」

「……わたし、ご当主さまの奥様スキスキアピールも大概うっとう

しいと思っただけ」

「新婚夫婦のバカツプルぶりの方が更にウザって思います……」

「おじよー様あ、王子様に頼んであたしたちと釣り合いが取れそうな身分の近衛さん連れてきてもらってくださいよ！ 自分たちだけ幸せってズルいですう！」

それって集団お見合いってやつでは。

確かに近衛には、お貴族サマのボンボンとは別に実力重視で選ばれた庶民の方々もいるけどね？ 気安くて、余計に競争率が高いつてわかってるのかなー。

あー、まあ、機会があつたらねー、そう適当に誤魔化して、あたしは旦那様が待つ部屋へ向かった。

えへー、どうかなー、なんて照れながら顔を覗かせたあたしを迎えたのは、想像通り満面の笑みを浮かべた王子。

「お似合いですよ。可愛い」

こうしてとても嬉しそうに笑ってくれちゃうから、贈り物攻撃禁止！ って、強く言えないんだ。

童顔からくる“可愛い”って褒め言葉があたしはキライだったんだけど、王子にそう言われるのは嫌じゃない。意味が違うから。

にこにこにこにこしながら王子はあたしを抱き上げて、ソファに移動する。

そんなにこにこしちゃって、可愛いのは王子の方だー！！

なんだかたまらん気分になって、王子の頭をグシャグシャした。きよとんとした様がまた可愛いし。

なんですか？ と訊ねる紫の瞳に、さっきの助言を思い出す。そうそう、嬉しいのは置いといて、一応言っておかなきゃね。

「あのね、オミヤゲありがとう。でも、オミヤゲ買うのに悩む時間、王子が早く帰って来てくれる方がいいな」

ちょこつと上目遣いで、だっけー？

身長差があるからいつも見上げてるけど、膝だっこされてる今は丁度いい距離感。

これでいいのか、コリーン？

「……………わかりました」

おっ、効いたっ！

ニコツと笑うと、同じく微笑んだ王子が頬を撫でてくる。

「そうですね、時間が勿体無いですものね、仕事も最速で終わらせて帰ります、明日から」

え、お仕事はちゃんとしていいのよ？ オミヤゲさえ控えてくれたら……………って王子どこいくの？ 移動するときあたしを常に抱き上げるのも控えて欲しいのよ、子どもじゃないんだから……………いや何で寝室。え。

え。

「カノンどのを置いて仕事に行くのは私も嫌ですが、帰ってきたらご褒美があると思えば……………」

ね？ なんてそんなトコ触りながら爽やかな笑顔で言わないでー！  
なんか違うっつ、というあたしの叫びは口づけに飲み込まれた。

……うん、ええと、このようにうちの旦那様は毎日毎日だだ甘で  
す……。

了・

( ブログ小話 初出…2010/05/09 )

## 設定覚書

大抵の方がどうでもよいと思われるであろう人物紹介アンド簡単な世界設定暴露。

一章秘密篇読了をオススメです。

\*\*\*\*\*

### 緋の魔女・永和

カノン<永和>・シユライア・ラシエレット

春生まれ 26歳 身長148cm 黒髪 翠金の瞳

ラシエレット伯爵の一人娘。緋の魔女。外見ロリータしかし成人女性。趣味は薬草料理（使用人には不評）。

緋の魔女でありながら、伯爵家の総領姫という矛盾を抱えている。魔女としても貴族としてもどっち付かず。能力は高い。

それなりに修羅場は経験していますが、恋愛経験のほうは全くゼロ。が、緋の一族のもとで半分育っているので耳年増。知識だけあります。

### 王子

イーディアス・グラム・<永和>・ラシエレット（イーディアス・グラム・フォート・ブランシェリウム）

冬生まれ 23歳 身長189cm 銀髪 紫瞳

ブランシェリウムの王子、もと世継ぎ。今の立場は、フォート公爵、東軍将。

文武両道ですがどちらかというと武人。おっとり温厚、しかし笑顔の下は天然腹黒自覚はない。趣味は妻観察。

経験はそれなりに。女性とは王太子としてお付き合いをしていたので、実はカノンが初恋かもしれない。

親父

ディオーン・ユーリアス・ラシエレット

秋生まれ 56歳 身長186cm 赤髪 翠金の瞳

カノンの父、ラシエレット伯爵。外交官。もと流民、傭兵。前ラシエレット伯の養子だが、実の孫息子。ややこしい。ブランシェリウムに来てからは文官職に就いているが、本来は剣士。性格はつかめない。妻激ラブ。

緋の魔女長・母様

アイラ<華炎>・ラシエレット（本来は姓無し）

夏生まれ 51歳 身長153cm 黒髪 黒瞳

カノンの母、緋の魔女長。外見は二、三十代にしか見えない。親父と出会ったのは19のとき。以来プロポーズ攻撃を受けストーキングされ、根負けして25歳の時にラシエレット伯爵の嫁に。冷静沈着しかしケンカっ早い一面も。親父が関わると短気。

王妃さま

スノーリア・ルチル・ランシア・ブランシェリウム

春生まれ 39歳 身長158cm 銀髪 紫瞳

ブランシェリウム王妃、王子の母。常に微笑みを絶やさない、外見女神、肝っ玉母さん。四男一女の母。

王様

エドヴァルト・ローグ・ブランシェリウム

54歳 身長193cm 金赤髪 青瞳

ブランシェリウム王、王子の父。外伝ではあんな感じですが本編にはまだ未登場。物心ついたときから戦場に立ち、武王としても名を馳せる。

殿下

サウスリード・フレグ・ブランシエリウム

19歳 身長178㎝ 金髪 青瞳

ブランシエリウムの第二王子、王子のすぐ下の弟。文官としての能力は高いが、剣はダメダメ。リスペクトする人物はラシエレット伯爵という将来が心配な少年。現在、押し付けられた継承権一位をどうやって返上しようかと画策中。

弟殿下

ラウレス・クローゼ・ブランシエリウム

13歳 身長163㎝ 金髪 紫紺の瞳

ブランシエリウムの第三王子。物静かで自分の存在を示すようなことがない。

双子殿下

姉：ゲエンドリン・エナ・ブランシエリウム

弟：フェリクス・コール・ブランシエリウム

8歳 身長138㎝ 銀髪 青瞳

おしゃまな姉、天然ボケ弟な双子。

その他

リリア・ラストー

19歳 ラシエレット伯爵家のドジっ子メイド。

グラント・ハイアス

35歳 ラシエレット伯爵家の家令。常に冷静。

カルマ

16歳 黒髪 黒瞳

緋の魔女、カノンの従姉弟。ツンツン、デレは何処に。

彼の活躍は二章でやって来るはず。

ヒサメ&ナギ

女に歳を訊ねるものじゃなくってよ。緋の魔女、カノンの幼なじみ。

ラスボス（のはず）

ヴァンセリアール

魔族。王子に呪いをかけたらしい。詳細不明。

魔族仲間の間では、『闊歩する迷惑』『災厄のマトリョーシヨカ』などと言われているらしい。

世界設定

パラレル異世界。

ところどころでデシャブな言語は翻訳（便利な言葉だなあオイ）。そもそも魔女ムコは“メルヘン新婚ファンタジー”をテーマに3000字前後のサイト拍手お礼文としてスタートしたもので、他の自作FTシリーズのように一から世界構築してないのです。なんとなく身近に感じる世界、というか。

名付けも、カノンたち緋の魔女は和名寄り、ブランシェリウムの方々は北欧くドイツ・フランス寄り、主にリズム重視で。

はい、ようするにテキトウです……。

ちなみにブランシェという花は牡丹みたいな八重咲きの薔薇がイメージ。フランス語で白をもじった。

隣接した世界に魔族がおります。

人里離れたところに竜もいます。

妖精はいませんが精霊はいます。多数の神様が存在し、国によって奉じられているものは違います。が、神の頂点に立つのは創り主、あとは配下という位置付けなので宗教を理由にした戦争はありません。（信仰する神によって仲の良い悪いはありませんが）  
緋の魔女は世界に創り主の巫なので、国に縛られません。

秘密篇の冒頭やラスト辺りで出てくる、冥界・輪廻の考え方は緋の魔女の本拠地のある辺り特有のもの。（つまりアジア的な…）  
一般的に、人は死んだら上ノ国（創り主のもと）に行くと思われているので、そのあとはないという考え。

そんな気楽な感じで魔女ムコは出来ております。

## 序

彼はふと微睡みから目を覚ました。

そういえば、アレはどうなっただろう、と思い出す。

見つけたのは少し前。

人間の感覚で言うなら十数年前。

下位の種族のわりに美しく、退屈しのぎの玩具にちょうどいい、と目をつけたニンゲン。

すぐに遊ぶには小さかったので、印だけつけて、放っておいた。

そうしたら、思っていたモノと違うモノになっていて、ガツカリした。

この自分をガツカリさせるなんて、と腹立たしかったので、呪ってやった。

じわじわと心を闇に墮とし、魂を腐らせる呪いを、与えてやった。

墮ちきる寸前を楽しもうと思っていたのに、また忘れていた。

どうも時間の感覚がニンゲンとは違うため、彼は忘れっぽく出来ているのだ。

もう死んだかな、つまらないな、と糸を引く。

屍が壊れていなければ、傀儡にでもしてやろう、そう思って。

しかし。

繰り返した彼の糸は、手応えなく空回った。

切れたわけではなく、消えたわけでもなく、在るのに、繋がってもいるのに、その先を引っ張ることが出来ない。

キョトンと瞬きして見えない糸を見つめる、彼の瞳が、ゆっくりと色を変える。

ぱちりぱちりと瞬きを続け、ゆらりゆらりと揺らめいて　呪の行方を見定め、にい、と笑った。

「緋の魔女とな。世界の贄が、小賢しい」

くつりくつりと愉しげに、笑い声を溢して、彼は褥から身を起こした

## 第一話 奥さまは魔女っ子(一) (前書き)

3 / 20 外伝・銀の歌姫 花冠を分離しました。それに伴い、外伝の  
一話二話分を魔女ムコ小話、解呪篇の序に入れ換えています。最  
新話の前に、一度目次までバックして未読分をお読みください。

こちらの前書きはしばらくしたら削除します

## 第一話 奥さまは魔女っ子（一）

「警告する！ 直ちに竜を解放し、投降せよ！」

意思の力を声に乗せ、放つ。一帯に響き渡るよう、この結界に閉ざされた中にも届くように。

ここに来てから数日、一定の期間をもって、通告を繰り返していったのだが、あちらから反応が帰ってきたことはない。

その間も辺りの草木は腐り果てながらその範囲を拡大し、大地には竜の呪詛が滲みこんでいるのに。この地を浄化するには、何年何十年とかかるだろう。

あたしの眼下に広がるのは、本来なら牧草地。ここの酪農製品は、チーズが絶品でうちでもときどき仕入れてた。ただ。もう、味わうことは出来ないだろう。

闇を刷いたように穢された町。

陽は高くこんなに明るいというのに、あたしには、周りの光景が、曇ってしか見えないのだ。

邪な魔術で乱れた理、それに、囚われた竜が吐く瘴気が混ざり合っている種々の術をなしている。

腐毒、とでもいおうか。触れるもの全てをその通り腐らせ拡がってゆく、呪術を。

あのような中で、住人はどうなっているのか。生命反応がないわけではないのに、精気を感じる事が出来ない、それがあたしを焦らせていた。

真眼を全開にしても、魂の色が感じられないなんて レージュ

の人口数を考えても、ありえない。

彼らはどうなったのか。

家畜の気配すら、感じられず、ただ勧告を繰り返すことしか出来ない身が呪わしい。

ナランザ国、レージュの町の異変が緋の魔女の元に届けられてから、八日。

あたしたちが転移した時にはもう町全体がこの現象に覆われていた。

これ以上腐毒が広がらないよう、派遣された全員で町の魔術師が張ったものとは別の結界で囲み、あちらからの反応を待ったけれど、産卵中の竜を捕らえて、邪術の糧にしようなどと考える輩が、言葉で説得できるとは考えてはいない。

事を起こした時点で、そいつが狂っている事は間違いないからだ。町の結界をぶっ壊して、囚われた竜を解放して、魔術師を処罰する。

町をぐるりと取り囲む、これだけの緋の魔女がいればたやすいこと。

だけどそれには許可が要る。

錠に縛られているあたしたちは、許可が出るまで動けない。

力を持つからこそ、個人の感情で動いてはいけないのだ。

調停者。バランスを保つ者。世界の代弁者などと言われているあたしたち一族だが、創り主の言の葉が薄れて等しい昨今、彼の巫である緋の魔女も古のように振る舞えるわけではない。

ぶっちゃけ今回の事件で言うなら、ナランザ国のお偉いさんが国

の威光だかなんだか、自国から世界の危機に関わる面倒ごとが起きていることを認めたくないとか、現実が見えていない状態で、緋の魔女の介入を拒みやがっているのだ。

こうしている間にも、町にいる命の炎は消えているというのに。

ああ。わずらわしいこと全部投げちゃって、掟無視して突っ込みたい

「五年前思い出すわよねー」

隣で杖にまたがったヒサメが呟く。

「それを考えたら、少しはオトナになったのねえ？」

うふつと無駄な色気を振りまきながら、ナギが。

それを合図にしたかのように、そこにいる全員が目があたしに集中した。

なにさ。

五年前？ 五年前って……、

記憶を探って、そういや以前も似たようなことがあったなあ、と思  
い当たる。

あれは確か、大量の死にを贄に異界の魔神を呼び出そうとか考  
えた馬鹿が戦争を誘発して 魔神どころかもっとまずい事態に  
なるのが見えてしまったあたしが、いっぱいいっぱいになって単身  
突入しちゃった出来事のことか。

付随して転がり込んできた面影に、今はそんな場合じゃないのよ  
と頭から振り落とす。

ああくそっ。

八日。八日もたつちやたじゃないの！

「ここ来たときのカノンの不機嫌さから二日持たないだろうなあと思っただけなのに」

うん？ 何で残念そうに言っただ、フミヲよ。

って、さっきから揶揄されてるのはあたしかっ！

不機嫌にもなるわよ、何でこんなときに事件起こしやがるんだとか、とつとと投降しろとか、頭の奴らいい加減にしろとか言いたくなるっの！

あたしは唸り声を漏らしてもう一度息を吸った。

「警告する！ 直ちに術の行使を止め竜を解放し、投降せよ！」

「カノンっ」

言い終わるより先に、こちらへ向かって何かが放たれた。

標的は あたし。

空気を裂いて飛来する風の矢。あたしはそれを防ごうと手を上げ後方にいた仲間の動きに、途中で力の方向を変えた。

矢が放たれた方向、魔力の流れ、残思を読んで射手を見定める。

構成を組むまでもなく、そいつはすぐに見つかった。

術をまどつて姿を隠しているけれど、あたしにはそこに人がいることがわかる。唇を小さく動かして、呪言を紡いだ。

そうする間に接近した鋭く尖った毒ある害意は、あたしに触れる刹那、カイヤとマオの障壁に阻まれ、消し飛ぶ。全て一瞬のこと。

文字通り一矢報いたと先走り、愉悦の笑みを浮かべていた男の顔が歪む。

その隙を逃さず、あたしは組み上げた術を発動した。

結界の内側、男の周りに張り巡らされていた不可視の魔術が、破裂するような音と共にあたしの力に解される。

勢い余って力の一部が男の頭を掠めたのはちよつとしたご愛敬。ワザトジャンナイデスヨ。

街の北側、鐘楼の天辺に、くたびれ果てた王立魔術士の外套を羽織った人物が突如としてその場に姿を現す。

自分の結界内にこちらの魔術が届いたことが信じられないのか、バードは落ち窪んだ目を見張り、身体を見回していた。

はいはい、バツチリ見えています。

もう一度、声を投げた。

「元ナランザ王立魔術士、バードに相違ないな？ 今すぐ禁術の行使を止め、投降せよ」

「小娘が……！ お前のような子どもに私の偉大なる術の価値がわかってたまるか！」

ピクリとこめかみがひきつる。

あゝあ、と溜め息を吐いたのは誰か。全員か。

「……言っちゃった……」

「禁呪よりも禁句なのに……」

「バーリドって確か、十九で最年少王立魔術士になって六年……」  
「今二十五歳？」  
「……………」

あたしは妙に静かな頭で全身に力を巡らせ溜め置き、同時に思考を練り上げて行く。

ソロリソロリと周りの仲間たちが後退するのに気づいたが、無視して。

その時を待つ。

感じる。

あの男が立つ鐘楼の背後の岩山から、今にも拘束の鎖を振り切つて外へ出ようとする、怒りに包まれた存在の、声。

一呼吸するたび、鼓動が一つ脈打つたび、憤怒と憎悪と周りのものすべてを呪詛する、竜の波動が、ここまで響いてくる。

道を外れた魔術士を捕縛するなら、緋の魔女がこれほど集まる必要はない。

一人、現実性を重視するなら二人で充分。

なのに何故、街の上空を覆うまでにあたしたちが集まっているかと言つと 囚われた竜のせいだ。

竜とは古き力持つ生き物。

その昔、神代には創り主に従属し、一の座を担っていた種族。いわば、あたしたちの同胞。

時が流れ、数を減らし希少種となった今も、その内包する魔力は緋の魔女長を軽く凌ぐ。歴代長随一と言われている母様が5人いて やつと対等つてくらの力があるのだ。

解放するだけならまだしも、こうまで我を失った竜を押さえるの

に、魔女一人二人じゃとても足りない。

だから今、ここに次世代を担うあたしたち全員が揃っている。

早く。早く早く早く

あたしの急いだ願いが通じたものか、すぐ側の空間に転移陣が開く音がする。

交渉のためにナランザ王城を訪れていたカイリが姿を現し、待ちに待った言葉を発した。

「是認された！ バーリドを捕縛せよ！」

カイリの声に術を放つと同時にあたしは急降下。予想していたのかもちろんみんなは止めない。

バーリドはこっちに任せたとばかりに、それぞれが力を行使していた。

ミヅホとハツキが街に張られた結界を解き、カイラとマオ、イザヤとカグヤが立ち込める瘴気を抑え、ココノエとイツハが浄化を行う。

ヒサメとナギが続いてあたしを追ってくるのも感じていたけど、とりあえず、まず。

「誰が小娘で子ども、だッ！ あたしはっ、人妻だ　　！！！」

魔術衣の守りもバーリドがとつさに構成した障壁も蹴散らして、あたしはヒールの踵を野郎の顔にめり込ませた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5858f/>

---

魔女とお婿様

2011年10月5日16時06分発行